



Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 Update 2 リリースノ ト



Sun Microsystems, Inc.
4150 Network Circle
Santa Clara, CA 95054
U.S.A.

Part No: 819-4905
2008年5月

Copyright 2008 Sun Microsystems, Inc. 4150 Network Circle, Santa Clara, CA 95054 U.S.A. All rights reserved.

本書で説明する製品で使用されている技術に関連した知的所有権は、Sun Microsystems, Inc. に帰属します。特に、制限を受けることなく、この知的所有権には、米国特許、および米国をはじめとする他の国々で申請中の特許が含まれています。

U.S. Government Rights – Commercial software. Government users are subject to the Sun Microsystems, Inc. standard license agreement and applicable provisions of the FAR and its supplements.

本製品には、サードパーティーが開発した技術が含まれている場合があります。

本製品の一部は Berkeley BSD システムより派生したもので、カリフォルニア大学よりライセンスを受けています。UNIX は、X/Open Company, Ltd. が独占的にライセンスしている米国ならびにほかの国における登録商標です。

Sun、Sun Microsystems、Sun のロゴマーク、Solaris のロゴマーク、Java Coffee Cup のロゴマーク、docs.sun.com、Java、Solaris は、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems, Inc. (以下、米国 Sun Microsystems 社とします) の商標もしくは登録商標です。Sun のロゴマークおよび Solaris は、米国 Sun Microsystems 社の登録商標です。すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、米国 Sun Microsystems 社が開発したアーキテクチャーに基づくものです。

OPEN LOOK および SunTM Graphical User Interface は、米国 Sun Microsystems 社が自社のユーザーおよびライセンス実施権者向けに開発しました。米国 Sun Microsystems 社は、コンピュータ産業用のビジュアルまたはグラフィカルユーザーインターフェースの概念の研究開発における米国 Xerox 社の先駆者としての成果を認めるものです。米国 Sun Microsystems 社は米国 Xerox 社から Xerox Graphical User Interface の非独占的ライセンスを取得しており、このライセンスは、OPEN LOOK GUI を実装するか、または米国 Sun Microsystems 社の書面によるライセンス契約に従う米国 Sun Microsystems 社のライセンス実施権者にも適用されます。

この製品は、米国の輸出規制に関する法規の適用および管理下にあり、また、米国以外の国の輸出および輸入規制に関する法規の制限を受ける場合があります。核、ミサイル、生物化学兵器もしくは原子力船に関連した使用またはかかる使用者への提供は、直接的にも間接的にも、禁止されています。このソフトウェアを、米国の輸出禁止国へ輸出または再輸出すること、および米国輸出制限対象リスト(輸出が禁止されている個人リスト、特別に指定された国籍者リストを含む)に指定された、法人、または団体に輸出または再輸出することは一切禁止されています。

本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も行われないものとします。

概要

Sun Java™ System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 製品は、Web サービスアプリケーションの構築と管理の作業を大幅に簡略化します。ソフトウェア障害やハードウェア障害が発生した場合にも稼働を続けられるスケーラブルなサービスなので、優れたパフォーマンス、クラスタリング、および高可用性を実現する機能を提供します。Application Server を使用して Web サービスを開発すれば、開発プロセスが単純になるだけでなく、独自の方法で柔軟に進化させることもできます。

- 3 ページの「このリリースノートについて」
- 4 ページの「リリースノートの変更履歴」
- 4 ページの「アクセシビリティ機能」
- 5 ページの「関連マニュアル」
- 6 ページの「問題の報告とフィードバックの方法」
- 7 ページの「コメントをお寄せください」
- 7 ページの「その他の情報」

このリリースノートについて

このリリースノートには、Sun Java System Application Server 8.1 2005Q2 リリース時点における重要な情報が記載されています。拡張機能、既知の問題、およびその他の最新の情報が記載されています。Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 をご使用になる前に、このリリースノートをお読みください。

このリリースノートの最新バージョンについては、Sun Java System の [マニュアル Web サイト \(http://docs.sun.com/app/docs/coll/1310.2\)](http://docs.sun.com/app/docs/coll/1310.2) を参照してください。ソフトウェアのインストールおよびセットアップを行う前に、この Web サイトを確認してください。また、それ以降も定期的にこのサイトをチェックして、最新のリリースノートや製品マニュアルを参照してください。

このマニュアル内で参照している第三者の URL は、追加の関連情報を提供します。

注- このマニュアル内で引用する第三者の Web サイトの可用性について Sun は責任を負いません。こうしたサイトやリソース上の、またはこれらを通じて利用可能な、コンテンツ、広告、製品、その他の素材について、Sun は推奨しているわけではなく、Sun はいかなる責任も負いません。こうしたサイトやリソース上の、またはこれらを経由して利用可能な、コンテンツ、製品、サービスを利用または信頼したことによって発生した(あるいは発生したと主張される)いかなる損害や損失についても、Sun は一切の責任を負いません。

リリースノートの変更履歴

ここでは、Sun Java System Enterprise Edition Application Server 8.1 Update 2 製品の初版リリース以降に各リリースノートで加えられた変更点を示します。

表 1-1 リリースノートの変更履歴

改訂日付	説明
2005 年 6 月	Sun Java System Application Server 8.1 2005Q2 Update 2 製品の初版リリース。
2005 年 9 月	既知の問題、修正済みのバグ、および各種のサポート URL への継続的なアップデート。
2005 年 10 月	Microsoft Windows サポートに関する情報を追加。
2006 年 2 月	一般的な編集上の修正、Red Hat パッチ RPM の URL の更新。
2006 年 4 月	最新のパッチリリースに関連する項目の第 3 章「既知の問題点と制限事項」への追加、製品マニュアルへのリンクの更新、Solaris のゾーンサポートに関する説明の追加。
2007 年 7 月	インストールに関する既知の問題に欠陥 6396045 を追加。
2007 年 8 月	Java ES 5 に対する適切な Solaris および Linux プラットフォームを反映するように、Web Server のプラットフォーム要件を変更。
2008 年 5 月	「システムの仮想化のサポート」の節を追加。

アクセシビリティ機能

このメディアの公開後にリリースされているアクセシビリティ機能(障害に配慮した機能)を入手する場合は、Sun が提供する Section 508 製品アセスメントに目を通し、アクセシビリティソリューションを配備する上でどのバージョンが最適かを検討してください。アプリケーションの更新されたバージョンは <http://sun.com/software/javaenterprisesystem/get.html> から入手できます。

アクセシビリティ機能に対する Sun のコミットメントについては、<http://sun.com/access> を参照してください。

関連マニュアル

Application Server Enterprise Edition 8.1 Update 2 製品には、<http://docs.sun.com/app/docs/coll/1310.1>に掲載されているマニュアルのセット全体が含まれています。

次の表に、Application Server Enterprise Edition 8.1 のマニュアルセットに含まれるものを要約して示します。

表1-2 マニュアルセットの内容

マニュアル名	説明
『Documentation Center』	1 か所で Application Server のすべてのトピックにアクセスできる場所。
『クイックスタートガイド』	Sun Java System Application Server 製品を使い始めるための入門ガイド。
『Installation Guide ¹ 』	Sun Java System Application Server ソフトウェアとそのコンポーネントのインストール。
『配備計画ガイド』	最適な方法で確実に Sun Java System Application Server を導入するための、システムニーズや企業ニーズの分析。Application Server を配備する場合に注意する必要がある一般的な問題と懸案事項についても解説します。
『開発者ガイド』	Sun Java System Application Server 上で動作することを目的とし、J2EE コンポーネントおよび API のオープン Java スタンドモデルに準拠した、Java 2 Platform, Enterprise Edition (J2EE™ プラットフォーム) アプリケーションの作成と実装。開発ツール、セキュリティー、アセンブリ、配備、デバッグ、ライフサイクルモジュールの作成などについての一般的な情報も提供します。
『J2EE 1.4 Tutorial』	J2EE アプリケーションを開発するための J2EE 1.4 プラットフォームテクノロジーおよび API の使用と、それらアプリケーションの Sun Java System Application Server への配備。
『管理ガイド』	Sun Java System Application Server サブシステムおよびコンポーネントの、管理コンソールからの設定、管理、および配備。
『高可用性 (HA) 管理ガイド』	高可用性データベースのための、インストール後の設定と管理に関する解説。
『Administration Reference』	Sun Java System Application Server 設定ファイル domain.xml の編集。

表 1-2 マニュアルセットの内容 (続き)

マニュアル名	説明
『Documentation Center』	1 か所で Application Server のすべてのトピックにアクセスできる場所。
『アップグレードと移行』	新しい Sun Java System Application Server プログラミングモデルへのアプリケーションの移行 (特に Application Server 6.x または 7 からの移行)。このマニュアルでは、製品リリース間の相違点と、製品仕様との不一致を招く可能性のある設定オプションについても説明します。
『パフォーマンスチューニングガイド』	パフォーマンスを改善するための Sun Java System Application Server のチューニング。
『トラブルシューティングガイド』	Sun Java System Application Server におけるトラブルの解決。
『Error Message Reference』	Sun Java System Application Server のエラーメッセージの解決。
『リファレンスマニュアル』	Sun Java System Application Server で使用できるユーティリティーコマンド。マニュアルページのスタイルで記述されています。asadmin コマンド行インタフェースも含まれます。

1 Application Server の『Installation Guide』は、Application Server のスタンドアロンインストールのために用意されています。

問題の報告とフィードバックの方法

Sun Java System Application Server で問題が発生した場合は、次のいずれかの方法でカスタマーサポートにお問い合わせください。

- [フィードバック送信フォーム](http://java.sun.com/docs/forms/J2EE14SubmittalForm.html)
(<http://java.sun.com/docs/forms/J2EE14SubmittalForm.html>) — Application Server 製品についてのフィードバックを送信するためのフォームです。
- [J2EE-INTEREST リスト](http://archives.java.sun.com/archives/j2ee-interest.html)
(<http://archives.java.sun.com/archives/j2ee-interest.html>) — J2EE に関する質疑を扱うメーリングリストです。
- [Java Developer Connection のバグデータベース](http://developer.java.sun.com/serlet/SessionServlet?url=/developer/bugParade/index.jshtml) (<http://developer.java.sun.com/serlet/SessionServlet?url=/developer/bugParade/index.jshtml>) — バグを閲覧または報告するには、この URL にある Java Developer Connection Bug Parade をご利用ください。
- [Java Technology Forums](http://forum.java.sun.com/) (<http://forum.java.sun.com/>) — Java のテクノロジーとプログラミング技法に関する知識と疑問を共有するための対話型掲示板です。Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 製品について議論するには、この J2EE SDK フォーラムをご利用ください。

- [Sun Software Support Services \(http://www.sun.com/service/sunone/software\)](http://www.sun.com/service/sunone/software) — Knowledge Base、オンラインサポートセンター、および Product Tracker。さらには保守プログラムやサポートに関する問い合わせ番号へのリンクが記載されています。
- 保守契約を結んでいるお客様の場合は、専用ダイヤルをご利用ください。最善の問題解決のため、サポートに連絡する際には次の情報をご用意ください。
- 問題が発生した状況および操作への影響などの、問題の具体的説明
- マシン機種、OS バージョン、および製品のバージョン (問題に関係するパッチおよびその他のソフトウェアを含む)
- 問題を再現するための具体的な手順の説明
- エラーログまたはコアダンプ

コメントをお寄せください

弊社では、マニュアルの改善に努めており、お客様からのコメントおよびご忠告をお受けしております。

<http://docs.sun.com> にアクセスして「コメントの送信」をクリックしてください。このオンラインフォームでは、マニュアルのタイトルと Part No. もご記入ください。Part No. は、7桁か9桁の番号で、マニュアルのタイトルページまたは最初のページに記載されています。たとえば、このマニュアルの場合、タイトルは『Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 リリースノート』、Part No. は 819-4905 です。

その他の情報

以下の場所から有益な情報を入手することができます。

- [Application Server の製品情報 \(http://www.sun.com/software/products/appsrvr/home_appsrvr.html\)](http://www.sun.com/software/products/appsrvr/home_appsrvr.html)
- [Application Server の製品マニュアル \(http://docs.sun.com/app/docs/coll/1310.4\)](http://docs.sun.com/app/docs/coll/1310.4)
- [Sun Java System マニュアル \(http://docs.sun.com/prod/java.sys\)](http://docs.sun.com/prod/java.sys)
- [Sun Java System プロフェッショナルサービス \(http://www.sun.com/service/sunps/sunone\)](http://www.sun.com/service/sunps/sunone)
- [Sun Java System ソフトウェア製品とサービス \(http://www.sun.com/software\)](http://www.sun.com/software)
- [Sun Java System Software Support Services \(http://www.sun.com/service/sunone/software\)](http://www.sun.com/service/sunone/software)
- [Sun Java System サポートと Knowledge Base \(http://www.sun.com/service/support/software\)](http://www.sun.com/service/support/software)
- [Sun サポートおよびトレーニングサービス \(http://training.sun.com\)](http://training.sun.com)
- [Sun Java System コンサルティングとプロフェッショナルサービス \(http://www.sun.com/service/sunps/sunone\)](http://www.sun.com/service/sunps/sunone)

- Sun Java System 開発者情報 (<http://developers.sun.com>)
- Sun 開発者サポートサービス (<http://www.sun.com/developers/support>)
- Sun Java System ソフトウェアトレーニング
(<http://www.sun.com/software/training>)
- Sun Software Data Sheets (<http://www.sun.com/software>)
- Sun Microsystems の製品マニュアル (<http://docs.sun.com/>)

Application Server 8.1 Update 2 2005Q2 の概要

Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 Update 2 は、大規模な本稼働環境を持つ J2EE アプリケーションおよび Java テクノロジベースの Web サービスを開発および配備するための、J2EE 1.4 プラットフォーム互換サーバーです。

この節では、次の点を説明します。

- 9 ページの「8.1 2005Q2 Update 2 リリースでの新機能」
- 11 ページの「ハードウェアとソフトウェアの要件」
- 20 ページの「Enterprise Edition 8.1 リリースで修正されたバグ」
- 22 ページの「Enterprise Edition 8.1 Update 2 リリースで修正されたバグ」
- 26 ページの「HADB に関する追加情報」
- 36 ページの「Application Server 製品リリース」
- 37 ページの「互換性の問題」
- 39 ページの「J2EE のサポート」
- 40 ページの「高パフォーマンス」
- 40 ページの「スケーラビリティ」
- 41 ページの「JavaServer Faces 1.1 のサポート」

8.1 2005Q2 Update 2 リリースでの新機能

Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 Update 2 には、次の拡張機能が含まれています。

- 改善された管理機能 — Application Server では、複数のマシンで構成される複雑なエンタープライズ配備を、セキュリティー保護された状態でリモート管理できます。このリモート管理には、ブラウザベースのコンソールか、スクリプトを使用できるコマンド行インタフェースを使用できます。また、セキュリティー保護された状態でリモートから管理および監視機能にプログラムアクセスするための JMX ベースの豊富な API も用意されています。

- **Message Broker** — Application Server には、高可用性、信頼性、高パフォーマンス、およびスケーラブルなメッセージングを実現する統合エンタープライズクラスのメッセージブローカが含まれています。
- **プラットフォームサポートの拡張** — サポートするオペレーティングシステム、データベース、ロケール、およびハードウェアが追加されています。
- **Sun Java Enterprise System** — Sun Java Enterprise System の主要な構成要素として、Application Server はポータルサービスおよびネットワークアイデンティティサービスと緊密に統合されています。
- **移行ツールとアップグレードツール** — これらのツールにより、J2EE アプリケーションの規格合致性および移植性を保証し、別の J2EE Application Server (JBoss、WebLogic、WebSphere) からの移行に役立ち、以前のバージョンの Sun ONE Application Server や iPlanet Application Server からのアップグレードを支援することが可能になります。
- **Java 2 Standard Edition 5.0 のサポート** — Application Server は、管理および監視のための拡張機能とパフォーマンスおよびスケーラビリティについての改善点を数多く含む Java 2 Standard Edition 5.0 をサポートしています。
- **Java Web Services Developer Pack 1.6 (JWSDP) のプラグインサポート** — すべての JWSDP プラグインがサポートされるようになりました。JWSDP 1.6 は <http://java.sun.com/webservices/downloads/1.6/index.html> から無料でダウンロードできます。
- **JDBC ドライバ** — Application Server には、Sun の JDBC ドライバが付属しています。
- **Web サービスセキュリティ** — これらのコンテナメッセージのセキュリティメカニズムは、SOAP Web サービス呼び出しのメッセージレベルでの認証(たとえば XML 電子署名および暗号化)を、OASIS WS-Security 規格の X509 およびユーザー名/パスワードのプロファイルによって実装しています。
- **WS-I Basic Profile 1.1** — J2EE 1.4 の仕様で規定されているように、このリリースは Web サービスアプリケーションの相互運用を可能にするための Web Services Interoperability (WS-I) Basic Profile 1.1 を実装しています。
- **iWay アダプタによるバックエンド接続** — Sun Microsystems は、現時点で 22 の iWay アダプタを、主要なバックエンドシステム (SAP、Siebel、Oracle、CICS、および IBM MQ Series) 向けに再販およびサポートしています。これは、Application Server 環境内から既存の IT アプリケーションを利用できるようにするためです。これらのアダプタは、J2EE Connector Architecture 1.5 仕様と Web サービス (SOAP) 規格をサポートしており、バックエンドアプリケーションに接続するための時間を節減する開発者ツールを含んでいます。
- **最新の HADB 管理システム** — UNIX™ プラットフォームは、新しい高可用性データベース (HADB) 管理システム (HADB Version 4.4.2-7) を備えています。このシステムには、データベースサーバー、ODBC 2.5 ドライバ、JDBC 3.0 Type 4 のドライバ、c lusql (SQL 文の入力と実行を行うための対話型プログラム)、および管理システムが含まれています。このバージョンにより、SSH や RSH に依存することが

なくなりますが、UDP マルチキャスト用にネットワークを設定する必要があります。HADB の要件と制限事項の詳細は、『[Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 高可用性 \(HA\) 管理ガイド](#)』を参照してください。

- **Solaris 10** ゾーンのサポート - Application Server は、Solaris 10 システムの大域ゾーンまたは非大域ゾーンのどちらにもインストールできます。別の Application Server インストールがすでに大域ゾーンにインストールされている場合でも、Application Server Enterprise Edition 8.1 を「完全ルート」の非大域ゾーンにインストールできます。Solaris ゾーンについては、[Solaris ゾーン](#) (<http://www.sun.com/bigadmin/content/zones/>)のページを参照してください。

ハードウェアとソフトウェアの要件

ここでは、Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 製品をインストールする前に満たしている必要のある要件を示します。

- 11 ページの「プラットフォーム要件」
- 12 ページの「システムの仮想化のサポート」
- 12 ページの「重要なパッチ情報」
- 13 ページの「JDBC ドライバとデータベース」
- 14 ページの「Oracle の設定」
- 15 ページの「PointBase の設定」
- 15 ページの「Web サーバー」
- 16 ページの「ブラウザ」
- 17 ページの「HADB の要件とサポートされているプラットフォーム」
- 18 ページの「Sun Java System Application Server のアップグレード」
- 18 ページの「サポートされている J2SE バージョンへの切り換え」
- 19 ページの「その他の要件」

プラットフォーム要件

次の表に、Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 製品でサポートされているオペレーティングシステムを示します。また、Application Server をインストールして実行するための最小および推奨のメモリー要件も示します。

表 2-1 Sun Java System Application Server 8.1 2005Q2 のプラットフォーム要件

オペレーティングシステム	最小メモリー	推奨メモリー	最小ディスク容量	推奨ディスク容量	JVM
Sun Solaris 8、9、10 (SPARC)	512M バイト	1G バイト	250M バイトの空き領域	500M バイトの空き領域	J2SE 1.4.2_06、J2SE 5.0
Solaris 9、10 (x86)					

表 2-1 Sun Java System Application Server 8.1 2005Q2 のプラットフォーム要件 (続き)

オペレーティングシステム	最小メモリー	推奨メモリー	最小ディスク容量	推奨ディスク容量	JVM
Red Hat Enterprise Linux 2.1 Update 2、3.0 Update 1	512M バイト	1G バイト	220M バイトの空き領域	300M バイトの空き領域	J2SE 1.4.2_06、J2SE 5.0
Windows Server 2000 SP4+ Windows 2000 Advanced Server SP4+ Microsoft Windows Server 2003 Windows XP Pro SP1+	1G バイト	2G バイト	500M バイトの空き領域	1G バイトの空き領域	J2SE 1.4.2_06、J2SE 5.0

UNIX では、オペレーティングシステムのバージョンを `uname` コマンドで確認できます。ディスク容量は `df` コマンドで確認できます。

システムの仮想化のサポート

システムの仮想化は、複数のオペレーティングシステム (OS) インスタンスを共有ハードウェア上で個別に実行できるようにするテクノロジーです。機能的にいうと、仮想化された環境でホストされる OS に配備されたソフトウェアは、通常はベースとなるプラットフォームが仮想化されていることを認識しません。Sun では、精選されたシステムの仮想化と OS の組み合わせについて、その Sun Java System 製品のテストを行っています。これは、Sun Java System 製品が、適切な規模と構成の仮想化された環境で、仮想化されていないシステム上の場合と同様に引き続き機能することを実証するためのテストです。仮想化された環境における Sun Java System 製品のサポートについては、[System Virtualization Support in Sun Java System Products](#) を参照してください。

重要なパッチ情報

現時点で Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 に必要なパッチについては、<http://sunsolve.sun.com> にアクセスして、「app server 8.1 patch」を検索してください。Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 のリンクをたどります。オペレーティングシステムのパッチ要件が変わって Java Enterprise System コンポーネントに対するパッチが利用可能になると、最初は推奨パッチクラスタとして SunSolve からアップデートが入手可能になります。

Solaris のパッチ要件

Solaris 9 または 10 (x86 または SPARC) を使用する場合には、「Sun 推奨パッチクラスタ」をインストールすることをお勧めします。このパッチクラスタは、SunSolve の & セキュリティパッチ (<http://sunsolve.sun.com/>) から入手できます。

RedHat Enterprise Linux 3.0 の追加パッケージ要件

インストールプログラムをはじめとして、この製品のネイティブコンポーネントを実行するには、標準の RedHat Enterprise Linux 3.0 ディストリビューションには含まれていないパッケージをインストールする必要があります。

compat-libstdc++-7.3-2.96.118.i386.rpm をインストールする必要があります。

このパッケージは、<http://rpm.pbone.net/index.php3/stat/4/idpl/843376/com/compat-libstdc++-7.3-2.96.118.i386.rpm.html> からダウンロードできます。

JDBC ドライバとデータベース

Sun Java System Application Server は、対応する JDBC ドライバを備えた任意の DBMS への接続をサポートするように設計されています。Sun がテストし、J2EE 準拠のデータベース設定を行うのに使用できることが確認されたコンポーネントを、次の表に示します。

表 2-2 J2EE 準拠の JDBC ドライバ

JDBC ベンダー	JDBC ドライバのタイプ	サポートされるデータベースサーバー
i-net Software	Type 4	Oracle (R) 8.1.7、9i、9.2.0.3 Sybase ASE 12.5.2 Microsoft SQL Server 2000 4.0 Service Pack 1
IBM	Type 2	IBM DB2 8.1 Service Pack 3+
PointBase	Type 4	PointBase Network Server 4.8
DataDirect	Type 4	Oracle (R) 8.1.7、9i、9.2.0.3 Sybase ASE 12.5.2 Microsoft SQL Server IBM DB2 8.1 Service Pack 3+
Sun Java System JDBC Driver for Oracle	Type 4	Oracle (R) 9.2.0.3、10G

表 2-2 J2EE 準拠の JDBC ドライバ (続き)

JDBC ベンダー	JDBC ドライバのタイプ	サポートされるデータベースサーバー
Sun Java System JDBC Driver for DB2	Type 4	IBM DB2 8.1 Service Pack 3+
Sun Java System JDBC Driver for Sybase	Type 4	Sybase ASE 12.5.2
Sun Java System JDBC Driver for Microsoft SQL Server	Type 4	Microsoft SQL Server 2000 4.0 Service Pack 1
Oracle	Type 4、Type 2	Oracle (R) 9.2.0.3、10G

i-net Software については、<http://www.inetsoftware.de/> を参照してください。

DataDirect Technologies については、<http://www.datadirect.com/> を参照してください。

Oracle の設定

J2EE 1.4 に準拠するように Oracle JDBC ドライバを適切に設定する必要があります。Type 2 および Type 4 のドライバを次のように設定してください。

▼ Oracle を設定するには

- 1 9.2.0.3 以降の JDBC ドライバを使用します。
- 2 Oracle データベースのパラメータファイル (init.ora) に `compatible=9.0.0.0` またはそれ以上の値を加えます。
- 3 `ojdbc14.jar` ファイルを使用します。
- 4 **Application Server** の設定を変更して **JVM** のプロパティを次のように定義します。

```
-Doracle.jdbc.J2EE13Compliant=true
```

さらに、Type-2 のドライバについては、Application Server が起動される環境で `ORACLE_HOME` 変数と `LD_LIBRARY_PATH` 変数 (ここには `$ORACLE_HOME/lib` が含まれている必要がある) の両方を定義する必要があります。たとえば、これらを `asenv.conf` ファイルに追加し、必ずエクスポートされるようにします。

PointBase の設定

多くのサンプルアプリケーションは、Application Server に付属の PointBase データベースサーバーを使用しています。Application Server Enterprise Edition を使用する場合、事前に PointBase データベースサーバーを設定する必要があります。

PointBase を設定するには、次の 2 つの方法があります。

1. オペレーティングシステムおよびシェルの適切なコマンドを使用して、環境変数 `JAVA_HOME` を J2SE がインストールされているディレクトリに設定します。次に例を示します。`% setenv JAVA_HOME "/opt/SUNWappserver/jdk"`
2. 次のように、Application Server の PointBase 設定ファイルを編集します。

- a. Solaris および Linux システムでは、`install_dir/pointbase/tools/serveroption/pbenv.conf` 設定ファイルを編集して、次の行を変更します。

```
PB_JAVA=%%PB_JAVA%%
```

上記の行を次のように変更します。

```
PB_JAVA=J2SE_location
```

- a. Windows システムでは、`install_dir\pointbase\tools\serveroption\pbenv.bat` 設定ファイルを編集して、次の行を変更します。

```
PB_JAVA=%%PB_JAVA%%
```

上記の行を次のように変更します。

```
PB_JAVA=J2SE_location
```

ここで `J2SE_location` は、J2SE がインストールされているディレクトリです。Application Server と一緒に J2SE をインストールした場合、J2SE はデフォルトで `install_dir/jdk` にインストールされます。

この変更を加えた後で、`startserver` スクリプトを使用して PointBase を起動できます。

Web サーバー

ここでは、Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 向けにサポートされている Web サーバーを示します。

表 2-3 サポートされている Web サーバー

Web サーバー	バージョン	オペレーティングシステム
Sun Java System Web Server	6.1+	Solaris SPARC 9、10 Solaris x86 9、10 Red Hat Enterprise Linux 3 および 4
Apache Web Server	1.3+、1.4、2.0	Solaris SPARC 9、10 Solaris x86 10 Red Hat Enterprise Linux 3 および 4 Windows Server 2003 Windows 2000 Advanced Server SP4+ Windows Server 2000 SP4+ Windows XP Pro SP1+
Microsoft IIS [®]	5.0+	Windows Server 2003 Windows 2000 Advanced Server SP4+ Windows Server 2000 SP4+ Windows XP Pro SP1+

ブラウザ

ここでは、Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 でサポートされているブラウザを示します。

表 2-4 サポートされている Web ブラウザ

ブラウザ	バージョン
Mozilla	1.4、1.5、1.6、1.7.x
Netscape Navigator	4.79、6.2、7.0
Internet Explorer	5.5 Service Pack 2、6.0

HADBの要件とサポートされているプラットフォーム

11 ページの「ハードウェアとソフトウェアの要件」に示されている要件に加えて、システムが、下に示されている HADB を実行するための要件を満たしていることを確認してください。

- 17 ページの「サポートされるプラットフォーム」
- 17 ページの「HADB サーバーホストの要件」
- 18 ページの「HADB 管理ホストの要件」
- 18 ページの「HADB クライアントホストの要件」

注 - システムの Java コンポーネントは JDK 1.4.2_02 を使用して構築され、JDK 1.5 上でテストされています。

サポートされるプラットフォーム

- **Solaris (SPARC)** - Solaris 8 MU7, Solaris 9 MU7, Solaris 10 RR。
- **Solaris (x86)** - Solaris 9 MU7, Solaris 10 RR。
- **RedHat Enterprise Linux** - 2.1 U5 (ext3 はサポートされず、ext2 ファイルシステムのみがサポートされている)、3.0 U4 (ext2 と ext3 の両方がサポートされている。U4 より前のアップデートは、過剰なスワッピングのために推奨されない)。これらのオペレーティングシステムバージョンでは、HADB が 32 ビットモードでのみテストされていることに注意してください。また、HADB が、オペレーティングシステム内のバグのために 64 ビットモードで動作している RedHat Enterprise Linux 3.0 をサポートしていないことにも注意してください (HADB への影響の詳細は、57 ページの「高可用性」の既知のバグ 6249685 を参照)。
- **Microsoft Windows** - Microsoft Windows 2000 Advanced Server Service Pack 4 および Microsoft Windows 2003 Enterprise Edition。HADB が、間もなく登場する、64 ビットモードの Microsoft Windows オペレーティングシステムバージョンをまったくサポートしていないことに注意してください。

HADB サーバーホストの要件

- 最小メモリー - ノードあたり 320M バイト。
- 最小空きディスク容量 - ホストあたり HADB バイナリ用に 70M バイト。さらに、データデバイスにもディスク容量が必要、ノードあたりテストインストール用に 512M バイト。
- 推奨メモリー - ノードあたり 512M バイト。
- 推奨空きディスク容量 - ホストあたり HADB バイナリ用に 70M バイト。さらに、データデバイスにもディスク容量が必要、ノードあたりテストインストール用に 1200M バイト。

注-HADB データとログファイルを格納するデバイスで書き込みキャッシュが無効になっていることを確認してください。一部の Solaris プラットフォーム (たとえば、Solaris x86) では、デフォルトで書き込みキャッシュが有効になります。

HADB 管理ホストの要件

- 最小メモリー - 128M バイト
- 最小空きディスク容量 - ノードあたり HADB バイナリ用に 70M バイト

HADB クライアントホストの要件

- 最小メモリー - 120M バイト
- 最小空きディスク容量 - 20M バイト

Sun Java System Application Server のアップグレード

Application Server の以前のどのリリースからも、上書きアップグレードはサポートされていません。以前のバージョンの Application Server から現在のバージョンへのアップグレードに関する詳細な指示については、『[Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 Upgrade and Migration Guide](#)』を参照してください。

サポートされている J2SE バージョンへの切り換え

PointBase を Application Server とともに使用する場合は、J2SE 1.4.2 をダウンロードし、それを付属の J2SE 5.0 JVM の代わりに使用してください。これを行うには、次の手順に従います。

▼ J2SE 1.4.2 に切り替えるには

- 1 まだインストールされていない場合、**J2SE 1.4.2 SDK (JRE ではない)** をダウンロードしてシステムにインストールします。
J2SE 1.4.2 SDK は、<http://java.sun.com/j2se/1.4.2/> からダウンロードできます。

- 2 **Application Server** を停止します。
コマンド行から、次のように入力します。

```
install_dir/bin/asadmin stop-domain
```

管理コンソールで次のようにします。

- a. 「アプリケーションサーバー」ノードをクリックします。

- b. 「インスタンスの停止」をクリックします。
- 3 `install_dir/config/asenv.conf` ファイル (Windows では `asenv.bat`) を編集して、`AS_JAVA` の値を **J2SE 1.4.2** のホームディレクトリを指すように変更します。
- 4 `as-install/samples/common.properties` ファイルを編集して、`com.sun.aas.javaRoot...` で始まる行を **J2SE 1.4.2** のホームディレクトリを参照するように変更します。
- 5 **Application Server** を再起動します。
コマンド行から、次のように入力します。

```
install_dir/bin/asadmin start-domain
```


管理コンソールで次のようにします。
 - a. 「アプリケーションサーバー」ノードをクリックします。
 - b. 「インスタンスを起動」をクリックします。

その他の要件

Sun Java System Application Server ソフトウェアをインストールする前に、次の追加の要件が満たされるようにしてください。

- 空き領域 — 一時ディレクトリには、少なくとも、Sun Java System Application Server のインストール用に 35M バイトの空き領域と、SDK のインストール用に 250M バイトの空き領域が必要です。
- アンインストールプログラムの使用 — システムから **Application Server** を削除する必要がある場合は、ソフトウェアに付属のアンインストールプログラムを使用することが重要です。他の方法を使って削除すると、同じバージョンの再インストールや新しいバージョンのインストールを行うときに問題が発生する可能性があります。
- 空きポート — 利用可能な未使用ポートが7つ必要です。
 - インストールプログラムは、使用されているポートを自動的に検出し、その時点で未使用のポートをデフォルトの設定として示します。デフォルトでは、HTTP については **8080**、HTTPS については **8181**、Administration Server については **4849** が初期デフォルトポートです。
 - インストールプログラムは、使用されているポートを検出し、それ以外の2つのポートを割り当てます。そのポートは、Sun Java System Message Queue (デフォルトでは、7676) と、IIOP (デフォルトでは、IIOP の場合は 3700、IIOP/SSL の場合は 1060 と 1061) です。これらのデフォルトポート番号が使用されている場合、インストールプログラムは動的ポートの範囲から無作為にポート番号を割り当てようとします (これは利用可能な次のポート番号とはかぎらない点に注意)。

インストール済みサーバーの起動 (UNIX) — インストール済みサーバーを置き換える場合以外は、Sun Java System Application Server 8.1 のインストール処理を開始する前に、インストール済みサーバーを起動してください。インストールプログラムが使用中のポートを検出するため、使用中のポートがほかの目的に使用されることはありません。

- インストール済みサーバーの置き換え (UNIX) — 古いバージョンの Sun Java System Application Server がインストールされており、それを現在のバージョンの Application Server に置き換える場合は、新しいサーバーをインストールする前に、インストール済みサーバーを停止してください。インストールプログラムのアップグレードウィザードを使ってサーバーをアップグレードしてください。
- ファイアウォールのシャットダウン (Microsoft Windows) — Sun Java System Application Server ソフトウェアをインストールする前に、すべてのファイアウォールソフトウェアを停止する必要があります。一部のファイアウォールソフトウェアはデフォルトですべてのポートを無効にするからです。インストールプログラムは、使用可能なポートを正確に検出できる必要があります。

互換性に関するその他の情報については、『[Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 Upgrade and Migration Guide](#)』を参照してください。

Enterprise Edition 8.1 リリースで修正されたバグ

ここでは、お客様から報告された問題のうち、Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 製品で解決されたものを示します。

バグ番号	説明
4887079	配備と配備の取り消し、および配備されているアプリケーションの検索を実行するためのプログラミング API。
4911462	ポートが使用可能な範囲を外れているときの正しくないメッセージ。
4918535	sun-appserv-deploy() が、createAndDropTables() をサポートするフラグを取らない。
4939749	xml:()lang() 値は、Deploytool によって自動的に挿入されるべきではない。
4946914	クラスタに対する配備サポート。
4979136	ディレクトリベースの配備によって、アプリケーションがバックアップディレクトリにコピーされる。
4987274	Bean のリモートインタフェースに Util() という名前が付いていると、配備が失敗する。

バグ番号	説明
4988818	J2SE 1.5 が使用されていると、透過的持続性ランタイムテストが失敗する。
4992295	コマンド行インタフェースでのシステムコンポーネントの配備は成功するが、サーバーのログファイルにエラーが記録される。
4994790	<i>precompilejsp=true</i> を使用して配備された JSP が、 <i>sun-web.xml</i> でコンパイラフラグを使用しない。
4996876	ベリファイアと、 <i>verify=true</i> による配備のレポートが異なる。
5003356	最新の <i>server.policy</i> ファイルアップデートが Upgradetool によって処理されない。
5006854	<i>asadmin deploy --virtualservers</i> が配備に失敗する。
5007309	HTTP リスナーアクセプタスレッドに対する不適切なデフォルト値。
5008941	アプリケーションが配備取り消しの後で再度配備されたとき、JSR88 の起動操作が失敗する。
5016848	Windows で、JDK JAR ファイルキャッシュと閉じられていないファイルによって、一部の再配備が妨げられる。
5017956	JAR モジュールレベルでの <i>list -m</i> によって EJB が表示されない。
5030425	<i>deploydir</i> コマンドで <i>security-role-mapping</i> の変更が無視される。
5041343	<i>servlet-mapping url-pattern- -directory</i> が常に / で囲まれているかどうかチェックされない。
5046120	大規模アプリケーションの配備中に SEVERE ログメッセージが出力される。
6041268	HTTP TRACE を無効にする機構がない。
6062410	地域対応化されたマシンで、Upgradetool が英語で起動される。
6067341	Web アプリケーションで <i>ejb-refs</i> を使用して <i>deploydir</i> コマンドを実行すると、リモートインタフェースの <i>rmic</i> で失敗する。
6152752	SPEC J2004 テストの実行中に <i>outofbound</i> 例外がログに記録される。
6154949	接続検証が機能しない。
6157310	関係管理中に、ランタイムで「Collection」フィールドが再読み込みされる。
6165491	ドメインがデフォルトドメインとは別のパスに作成されていると、ドメインの起動に失敗する。
6171667	ライフサイクルモジュールのプロパティ要素が <i>domain.xml</i> に作成されない。

バグ番号	説明
6171729	MDB の配備中に、文字列でない RA ActivationSpec プロパティで IllegalArgumentException が発生する。
6172178	OSS/JTT TCK で、リモートアプリケーションサーバーからの JMS 接続ファクトリの取得に失敗する。
6172589	セキュリティーマネージャーの呼び出しの最適化。
6183492	[DataDirect] DB2: 一部の透過的持続性アプリケーションサーバーテストで、EJB の呼び出し中に例外がスローされて失敗する。
6184864	OR 演算子を使用し、式に Null の単一値 CMRS が含まれていると、EJB QL クエリーで結果が返されない。
6197393	Deploytool で、配備記述子に message-destination 要素が作成されないことがよくある。
6198796	アプリケーションを配備する場合、EE サンプルの asadmin コマンドに availabilityenabled=true() オプションを含める必要がある。
6198981	クラスパスに xalan.jar ファイルがないと、ドロップダウンが空になり、Web サービスウィザードが失敗する。
6199076	asant スクリプトを使用して、Duke 書店サンプルのフェイルオーバーテストを実行できない。
6202363	mq-failover サンプルアプリケーション内の 1 つの ant ターゲットで、クラスタ名がハードコードされている。
6202606	JMS と Message Queue の間の SSL JMS に JMS サービス設定を使用できない。
6206176	Application Server 8.1 で、startserv/stopserv にアクセス権 755 が必要である。
6207297	デフォルトの SSL ポート番号 (443) を使用しないで Application Server にアクセスすると動作しない。
6207862	asadmin create-domain --help によって生成された一部が正しくない。

Enterprise Edition 8.1 Update 2 リリースで修正されたバグ

ここでは、お客様から報告された問題のうち、Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 Update 2 製品で解決されたものを示します。

バグ番号	説明
4842830	例外「ComStream is closed」が JDBC クライアントに送信される。

バグ番号	説明
4847716	望ましくない動作を引き起こす可能性があるため、コミットモードの設定に <code>execute/executeUpdate</code> を使用するべきではない。標準の JDBC の <code>setAutocommit()</code> を使用する必要がある。
4861326	ステートメントプールで、 <code>CREATE SCHEMA</code> が暗黙の <code>SET SCHEMA</code> として認識されない。
4891060	リスナーがソケットで待機しているときにアドレス指令を無視する。
5042351	新規ノードが追加された後に作成された新規テーブルが、追加ノードに配布されない。
5061316	再断片化しているテーブルに対するクエリーが、「HADB-E-01792: Replica has been deleted」で失敗することがある。クエリーを再試行する必要がある。
5063175	ホストを単一/複数の両方のネットで使用している場合、 <code>hadbm create</code> はエラーを発生させるべきである。
5079029	単一ホストでパッケージの登録を解除すると、「The software package is in use by database instance and can not be removed」というエラーで失敗することがある。
5094611	管理リポジトリ内の書き込みトランザクションを開く必要のある管理操作が、きわめてまれなケースとして、そのトランザクションが開かれるのを待機して永久にハングアップすることがある。
5103186	Windows 2003 でネットワークが1つダウンしていると、NSUP を起動できない。
6225613	
6271063	HADB c パッケージ (Solaris: SUNWhadb, Linux: sun-hadb-c) バージョンのシンボリックリンク <code>/opt/SUNWhadb/</code> のインストールまたは削除によって、エラーが発生する。
6174781	管理エージェントが再起動された後の短期間、コマンド <code>hadbm status - nodes</code> によって、ノードが「不明」に等しい <code>nodestate</code> にあると表示されることがある。
6175436	<code>hadbm addnodes</code> または <code>hadbm refragment</code> が「HADB-E-11747: Nodegroup all_nodes exists already」というエラーで失敗した場合は、再度 <code>hadbm refragment</code> を実行する。
6174676 6179084	<code>configure-ha-cluster</code> を実行できない。
6178228	<code>configure-ha-cluster</code> の失敗。
6179010	
6181845	Windows 上で 2G バイトよりも大きなデータデバイスを作成できない。

バグ番号	説明
6189189	絶対パスが指定されたとき、 <code>export-http-lb-config</code> で <code>loadbalancer.xml</code> のファイル名が作成されない。
6198225	『クイックスタートガイド』に、文の繰り返しの誤植がある。
6195779	一部のフィルタドロップダウンリストのオプションの値が国際化されていない。
6196741	J2SE 1.4.x をアップグレードするとき、付属の J2SE コンポーネントの代わりのアップグレードが正常に動作しない。
6207616	ホストがダウンしていると、任意の <code>hadbm</code> コマンドが、管理エージェントへの接続が必要な場合に数分間ハングアップすることがある。
6212791	ツリーノードをクリックしても、項目が右の区画に表示されない。
6216096	ハングしているトランザクションによってログバッファがいっぱいになり、多数のトランザクションが中止されることで、ノードクラッシュが引き起こされる。
6225613	<code>executeUpdate()</code> における整合性のない LOB サイズ。
6227502	EJB Timer サービスの初期化エラーは、 <code>SEVERE</code> としてログに記録されるべきではない。
6228789	<code>hadbm delete</code> コマンドが失敗する。
6230415	HADB-E-21070: 操作は制限時間内に完了しなかったが、キャンセルされてはいないため、あとで完了する可能性がある。
6230792	<code>hadbm:エラー 22009</code> : 発行されたコマンドが、ここ 300 秒の間進んでいない。
6232347	<code>dropandcreatetables</code> が、 <code>asadmin deploy --help</code> に対して完全には正しくない。
6232838	不必要なログ呼び出しのために、アプリケーションサーバーがスケーリングできない。
6232974	8.0 Platform Edition から 8.1 Enterprise Edition へのアップグレード時に、インストーラがノードエージェントの作成に失敗する。
6233142	HADB のインストール/アンインストールでは、ソフトリンク <code>/opt/SUNWhadb/4</code> が常に保持されるべきだが、必ずしもそのとおりになっていない。
6233276	フォーム認証が URL <code>-pattern /*.jsp</code> に対して機能しない。
6233469	<code>asadmin</code> ヘルプの正しくないヘルプテキスト。
6233476	<code>update-file-user</code> や類似のコマンドの正しくないヘルプテキスト。

バグ番号	説明
6237567	「管理オブジェクトリソースの作成」ウィンドウに、キー <code>adminObjectStep2PageHelp</code> がない。
6238477	同じアプリケーションサーバーインスタンス内の「corba name」EJB 参照を解決できない。
6239630	特定のエンティティー Bean を適切にマッピングできない。
6239837	JMS <code>server-config</code> の管理における「再接続間隔」の単位とデフォルト値が誤っている。
6240661	一部のメッセージが英語のロケールのままである。
6241311	「プールアイドルタイムアウト」フィールドの注記が間違っている。
6241368	管理コンソールのログイン画面とオンラインヘルプで、英語のブラウザ言語について触れていない。
6243395	JMS および JDBC のリソースでトランザクションリカバリが機能しない。
6245922	Application Server が連続してクラッシュする。
6246426	Web-INF/lib で JAR ファイルを展開すると、隠すべき内容が公開される。
6249637	JDBC 接続プールプロパティーを変更すると、再起動が必要になる。
6249662	Proxy-auth-cert が適切にフォーマットされていない。
6250989	SOAP 要素 <code>addChildElement</code> によって、マークアップのない不完全な要素が追加される。
6252187	高可用性シングルサインオンによって、異なるレルム間で主体が伝達される。
6252810	マニュアルページ内の <code>configure-ha-persistence</code> が最新ではない。
6253735	『クイックスタートガイド』に、高可用性に関する情報が含まれていない。
6254393	付属の『クイックスタートガイド』に、期限が切れたリリースノートへのリンクが含まれている。
6254462	データベースが再起動した後、接続検証コードによって NPE がスローされる。
6255253	付属のマニュアルの中の「購入方法」リンクの URL が間違っている。
6255440	同期のパフォーマンス向上。
6255458	<code>delete-virtual-server</code> における誤植。
6255524	UpdateTask ANT タスクが ANT 1.6.2 で動作しない。

バグ番号	説明
6255564	Platform Edition から Enterprise Edition へのアップグレードの後、アップグレードされたドメインの起動が、管理ユーザー認証の失敗のために失敗する。
6258844	8.1 Update 1 へのアップグレードの後、ファイルレلمユーザーのログインが機能しない。
6258997	コマンド行インタフェースのマニュアルページでの <code>--secure</code> オプションに対する正しい説明。
6259125	<code>asadmin get</code> のドキュメントが不十分であり、かつ紛らわしい。
6262564	PrivateKeyProcessor で、keyIdentifier による取得がサポートされない。
6262824	Solaris 10: 大域ゾーンで <code>ma-initd</code> スクリプトを使用して管理エージェントを停止すると、ローカルゾーンの管理エージェントも停止される。
6263684	Linux RPM パッチ生成スクリプトの README に手作業の変更が必要である。
6263686	<code>svr4</code> パッチ生成によって、正しくないエントリが README に挿入される。 <code>package-appclient</code> スクリプトが壊れている。
6264969	PointBase を使用しているすべての AS サンプルのセットアップが失敗する。データベースをバージョン 5.1 にアップグレードできない。
6265687	インストーラのグラフィックイメージに、正しくない製品バージョンが含まれている。
6266183	高可用性テストが失敗する。再起動後のレلم名に Null が含まれている。
6267410	ログレベルが FINE に設定されていると、 <code>session.invalidate()</code> 中に例外が発生する。

HADBに関する追加情報

ここでは、Application Server 8.1 に含まれている HADB 実装に関する重要な追加情報を示します。

- 27 ページの「HADB の拡張機能」
- 28 ページの「HADB のファイルシステムサポート」
- 28 ページの「高可用性データベースのアップグレード」
- 35 ページの「既知の SQL の制限事項」
- 36 ページの「高可用性ロードバランス」

HADBの拡張機能

- データベース管理に使用するパスワードの変更を可能にするために、新しい管理コマンド `hadbm setadminpassword` が実装されました。このコマンドは、使用する管理エージェントを示すオプションと、古いパスワードおよび新しいパスワードを取ります。詳細は、`hadbm setadminpassword` のマニュアルページを参照してください。
- 既存の管理コマンド `hadbm listpackages` が変更されています。以前、このコマンドはオペランドを取らず、関連する管理ドメイン内のすべてのパッケージを表示していました。変更によって、オプションのパッケージ名オペランドが導入され、その名前を持つパッケージのみが表示されます。そのオペランドが指定されない場合は、すべてのパッケージが表示されます。詳細は、`hadbm listpackages` のマニュアルページを参照してください。
- 既存の管理コマンド `hadbm createdomain` が変更されています。`hostlist` オペランドが、管理エージェントのポート番号も指定できるように拡張されました。この方法により、`hostlist` オペランドのみを使用してドメインが完全に指定されます。下位互換性のために、以前の動作も引き続きサポートされています。詳細は、`hadbm createdomain` のマニュアルページを参照してください。
- 管理システムからのエラーメッセージの一部が変更されています。これらの変更は、エラーメッセージのわかりやすさ、一貫性、および正確性を向上させることを目的としています。実際の変更は、このリリースノートには示されていません。
- インストールとアンインストールの動作が若干変更されています。HADBのインストールまたはアンインストールでは、ソフトリンク `/opt/SUNWhadb/4` が常に保持されるべきですが、必ずしもそのとおりにはなっていません。
- コマンド行でパスワードをコマンドオプションとして入力する場合がありますが、この方法は推奨されません。これは、コマンド行オプションとしてパスワードを取るすべての `hadbm` コマンドに当てはまります。`hadbm` コマンドでは、従来より、パスワードを次の方法で入力できるようになっています。
 1. パスワードファイル
 2. コマンド行オプション
 3. 対話型の入力

2つ目の方法のコマンド行オプションは安全でないと見なされるため、推奨されません。この方法でパスワードが入力されると、警告メッセージが表示されます。代わりに、1つ目の方法のパスワードファイルか、または3つ目の方法の対話型の入力を使用してください。コマンド行でのパスワードの使用は、次のリリースでは廃止される予定です。これは、コマンド行のパスワードオプションを取るすべての `hadbm` コマンドに適用されることに注意してください。

- HADBは、JGroups Version 2.2を使用するようにアップグレードされており、そのソースコードはHADBとともに配布されます。以前のHADBバージョンからのオンラインアップグレードをサポートするために、JGroups 2.1および2.2の両方がHADBとともに提供されます。JGroups 2.1の場合は、バイトコードのみが提供されます。

HADBのファイルシステムサポート

次のファイルシステムを使用するようHADBを設定する場合には、重要な考慮事項がいくつかあります。

- **ext2** および **ext3**– HADBは、Red Hat Application Server 3.0用にext2およびext3ファイルシステムをサポートしている。Red Hat Application Server 2.1については、HADBはext2ファイルシステムしかサポートしていない。
- Veritas– SolarisプラットフォームでVeritas File Systemを使用すると、「WRN: Direct disk I/O mapping failed」というメッセージが履歴ファイルに書き込まれる。このメッセージは、データデバイスおよびログデバイスについてHADBが直接入出力を有効にできないことを示している。直接入出力は、ディスクページに書き込むためのCPUコストを節減することによってパフォーマンスを向上させる。また、「ダーティ」なデータページを管理するためのオペレーティングシステムのオーバーヘッドを減らす。

Veritas File Systemで直接入出力を利用するには、次の方法の1つを使います。

- オプション `mincache=direct` でマウントされたファイルシステム上に、データデバイスとログデバイスを作成します。このオプションは、そのファイルシステム上に作成されるすべてのファイルに適用されます。詳細は、`mount_vxfs(1M)` コマンドを参照してください。
- Veritas Quick 入出力キューティリティーを使用して、ファイルシステムファイルに対するraw入出力を行います。詳細は、『VERITAS File System 4.0 Administrator's Guide for Solaris』を参照してください。

これらの設定は、Application Server 8.1 2005Q2 Update 2ではテストされていないことに注意してください。

Application Server ソフトウェアでのHADBのインストールと設定については、『Application Server Enterprise Edition 高可用性 (HA) 管理ガイド』を参照してください。

高可用性データベースのアップグレード

- 29 ページの「アップグレード前の作業とデータ移行」
- 29 ページの「アップグレード手順」
- 30 ページの「アップグレードのテスト」
- 31 ページの「配備とアップグレードに関する特別な情報」

▼ アップグレード前の作業とデータ移行

始める前に ユーザーは、HADB履歴ファイル、管理エージェント設定ファイル、ログファイルとリポジトリ、およびインストールパスの外部にあるすべてのデータデバイスを保管するようにしてください。この作業がまだ完了していない場合は、アップグレードの前に実行してください。管理リポジトリと設定ファイルを移動するには、次の手順に従います。

- 1 すべての古い管理エージェントを停止し、**HADB** ノードは動作したままにします。
- 2 各ホスト上で、リポジトリディレクトリを新しい場所に移動します。
- 3 各ホスト上で、dbconfigディレクトリを新しい場所にコピーします。
- 4 各ホスト上で、mgt.cfgファイルをアップデートし、dbconfigとリポジトリディレクトリの正しいパスを設定します。
- 5 アップデートされたmgt.cfgファイルを使用して管理エージェントを起動します。

▼ アップグレード手順

HADB Version 4.4.x から Version 4.4.2-7 にアップグレードするには、次の手順を実行します。

- 1 必要に応じて、上で説明したアップグレード前の作業を実行します。
- 2 **HADB Version 4.4.2-7** をすべての **HADB** ホストにインストールします。パスは **Version 4.4.x** とは別のパス、たとえば /opt/SUNWhadb/4.4.2-7 にします。
- 3 **HADB Version 4.4.2-7** を、**HADB** ホストとは別の hadbm クライアントホストにインストールします。
- 4 すべての **HADB** ホスト上で実行されているすべての管理エージェントを停止します。
- 5 新しいバージョンのソフトウェアを使用して(ただし、設定ファイルは古いまま)、管理エージェントプロセスを起動します。残りの手順では、新しいバージョンの bin ディレクトリにある hadbm コマンドを使用してください。
- 6 管理ドメインでパッケージを登録します。デフォルトのパッケージ名が **V4.4** になるので、同じ名前を持つ既存のパッケージとの競合を避けるために別のパッケージ名が必要になる場合があります。

```
hadbm registerpackage --packagepath=/opt/SUNWhadb/4.4.2-7 V4.4.2-7
```
- 7 hadbm listpackages コマンドを実行し、ドメインに新しいパッケージが登録されていることを確認します。

- 8 新しい **hadbm Version 4.4.2-7** を使用してデータベースを再起動します。デバイスと履歴ファイルを移動する必要がある場合は、オンラインアップグレードを、デバイスと履歴ファイル用の新しいパスの設定とともに1回の操作で実行します。

```
hadbm set packagename=V4.4.2-7,devicepath=new_devpath,  
historypath=new_histpath
```

そうでない場合、つまりデバイスと履歴ファイルがすでにインストールディレクトリの外にある場合は、ノードの順次再起動のみを行う次のコマンドを実行します。

```
hadbm set packagename=V4.4.2-7 database name
```

- 9 データベースが「実行中」の状態にあり (hadbm status コマンドを使用して確認)、かつ正常に動作してクライアントトランザクションを処理していることを確認します。
- 10 すべての正常に動作している場合は、あとで古いインストールを削除することができます。古いパッケージの登録を解除する前に、古いパッケージへのすべての参照をマリポジトリから削除します。そうしないと、「使用中のパッケージ」のために hadbm unregisterpackage が失敗します。たとえば、ダミーの再設定操作 hadbm set connectiontrace=same as previous value によって、古いパッケージへのすべての参照が削除されます。ここで、古いパッケージの登録を解除します。

```
hadbm unregisterpackage [--hosts=host-list] old package name
```
- 11 ファイルシステムから古いインストールを削除します。

▼ アップグレードのテスト

Solaris で、アップグレードの成功をテストするには、アップグレードが正常に実行されたことを確認します。

- 1 動作中のプロセスが新しいバイナリを使用していることを確認してください。すべての **HADB** ノードで、次のことを確認します。

```
new path/bin/ma -v  
new path/bin/hadbm -v
```

- 2 データベースが動作中かどうかを確認します。次のコマンドによって、すべての **HADB** ノードが「実行中」の状態にあることが表示されます。

```
new path/bin/hadbm status -n
```

- 3 **HADB** を使用している製品のポインタが、新しい **HADB** パスを指すように変更されていることを確認します。

- 4 HADBを使用している製品では、独自のアップグレードテストを実行して、HADBアップグレードも動作していることを確認できます。

オンラインアップグレードの後、新しいバージョンが正常に動作しない場合は、以前のHADBバージョンの使用に戻してください。ただし、管理エージェントリポジトリが変更されている場合は、HADB自体はダウングレードできますが、新しい管理エージェントを引き続き動作させる必要があります。

配備とアップグレードに関する特別な情報

ここでは、HADBの配備とアップグレードに関する追加情報を示します。

- [31 ページの「導入」](#)
- [34 ページの「4.4.1 から 4.4.2 へのオンラインアップグレード」](#)

導入

- デバイス、ログ、および履歴ファイルはローカルディスクにのみ格納するようにし、リモートマウントのファイルシステムは使用しないでください。
- ホストに複数のノードが配置されている場合は、各ノードに所属するデバイスを別のディスクに保管することをお勧めします。そうしないと、ディスクの競合によってパフォーマンスが低下します。この問題の症状は、「BEWARE - last flush/fputs took too long」などのメッセージによって履歴ファイルで確認できます。1つのノードに複数のデータデバイスファイルがある場合は、これらのデバイスファイルに別々のディスクを使用することをお勧めします。
- ローカルディスク(可能であれば、データデバイスに使用されているものとは別のディスク)を使用して、HADBホストにHADBバイナリをインストールしてください。NFSの遅延またはディスクの競合によって、履歴ファイルに「Process blocked for nnn, max block time is nnn」という警告が出力され、ノードが再起動される可能性があります。
- HADB デバイス、履歴ファイル、管理エージェントディレクトリ、およびエージェント設定ファイルをHADBパッケージのパスには配置しないでください。これを行うと、新しいバージョンにアップグレードし、古いパッケージのパスを削除したときに問題が発生します。
- このリリースのHADBでは、最大28ノード(24のアクティブデータノード、および4つのスペア)が正式にサポートされています。
- JDBCドライバおよびHADBサーバーには同じバージョンを使用することをお勧めします。
- IPv6はサポートしていません。IPv4のみです。
- Windowsでのコマンド行の長さは、2048バイトに制限されています。
- UDPマルチキャスト用にネットワークを設定する必要があります。

- RedHat Enterprise Linux 3.0 Update 1～3は、過剰なスワッピングが見られるため、配備プラットフォームとしてはお勧めできません。この問題は、RedHat Enterprise Linux 3.0 Update 4では修正されています。
- NSUPをリアルタイム優先度を使用して実行する可能性は次のとおりです。

ノードスーパーバイザー (NSUP) のプロセス (clu_nsup_srv) は、タイムリーな方法による「ハートビート」メッセージ交換を利用して、HADBの高可用性を保証します。NSUPがほかのプロセスと同じ場所に配置されていると、このタイミングが影響を受け、リソースの枯渇が発生します。その結果、誤ったネットワークパーティションが発生し、ノードが再起動します(その前に、履歴ファイルに「Process blocked for n seconds」という警告が出力される)。それにより、トランザクションの中止やその他の例外が発生します。

この問題を解決するには、clu_nsup_srv (installpath/lib/server に格納されている) の suid ビットを設定し、そのファイルをルートが所有する必要がある必要があります。これを手動で行うには、次のコマンドを実行します。

```
# chown root clu_nsup_srv
# chmod u+s clu_nsup_srv
```

これにより、clu_nsup_srv プロセスは、起動されると、ユーザー root として実行されます。さらに、起動後、自分自身にリアルタイム優先度を自動的に与えることができるようになります。setuid を使用することによるセキュリティーへの影響を避けるために、リアルタイム優先度は最初の間だけ設定され、優先度の変更されたらプロセスは有効な uid に戻ります。ほかの HADB プロセスは、優先度をタイムシェアするために自分の優先度を低くします。

NSUP がリアルタイム優先度を設定できない場合は、「Could not set realtime priority」(unix: errno will be set to EPERM) という警告を出力します。この警告は ma.log ファイルに書き込まれ、リアルタイム優先度を使用しないで処理が継続されます。

リアルタイム優先度を設定できない例として、次のような場合があります。

- Solaris 10 の非大域ゾーンにインストールされている場合
- Solaris 10 で、PRIV_PROC_LOCK_MEMORY (プロセスが物理メモリー内のページをロックできる) または PRIV_PROC_PRIOCNTL 特権、あるいはその両方が無効になっている場合
- ユーザーが setuid 権限を無効にしている場合
- ユーザーがソフトウェアを tar ファイルとしてインストールしている場合 (App.server 用のルート以外のインストールオプション)

clu_nsup_srv プロセスは CPU の消費が少なく、フットプリントも小さいため、リアルタイム優先度を使用して実行してもパフォーマンスには影響しません。

- Solaris での HADB 用の IP ネットワークマルチパスの設定 (Solaris 9 でのみテスト済み)

可能な範囲で最高のネットワーク可用性を保証するために、HADBを実行しているSolarisホストをネットワークマルチパスを使用して設定することをお勧めします。ネットワークマルチパスの設定は、『IP Network Multipathing Administration Guide』で詳細に説明されています。HADBでマルチパスを使用することにした場合は、後述されているHADB用のマルチパス設定への対応に進む前に、『IP Network Multipathing Administration Guide』の「Administering Network Multipathing」の節を参照してマルチパスを設定してください。『IP Network Multipathing Administration Guide』は、Solaris 9の『System Administrator Collection』に含まれており、<http://docs.sun.com>からダウンロードできます。

- ネットワークインタフェース障害検出時間の設定

HADBでマルチパスのフェイルオーバーを適切にサポートするには、`/etc/default/mpathd`内の`FAILURE_DETECTION_TIME`パラメータで指定されているネットワークインタフェース障害検出時間が1000ミリ秒を超えないようにする必要があります。元の値がこの値を超えている場合は、このファイルを編集して、このパラメータの値を1000に変更します。

```
FAILURE_DETECTION_TIME=1000
```

変更を有効にするために、次のコマンドを実行します。

```
pkill -HUP in.mpathd
```

- HADBで使用するIPアドレス

『Solaris IP Network Multipathing Administration Guide』で説明されているように、マルチパスを使用するには、物理ネットワークインタフェースをマルチパスインタフェースグループにグループ化する必要があります。このようなグループ内の各物理インタフェースには、物理インタフェースアドレスとテストアドレスの2つのIPアドレスが関連付けられます。データの送信に使用できるのは物理インタフェースアドレスのみであり、テストアドレスはSolaris内部の使用のためにのみ用意されています。`hadbm create --hosts`が実行されると、各ホストは、マルチパスグループの1つの物理インタフェースアドレスによってのみ指定されます。

- 例

ホスト1とホスト2のそれぞれに、2つの物理ネットワークインタフェースが含まれていると仮定します。各ホスト上で、これらの2つのインタフェースをマルチパスグループとして設定し、`ifconfig -a`を実行すると次の出力が得られます。

ホスト1

```
bge0: flags=1000843<mtu 1500 index 5 inet 129.159.115.10 netmask ffffffff0
broadcast 129.159.115.255 groupname mp0
bge0:1: flags=9040843<mtu 1500 index 5 inet 129.159.115.11 netmask ffffffff0
broadcast 129.159.115.255
bge1: flags=1000843<mtu 1500 index 6 inet 129.159.115.12 netmask ffffffff0
```

```
broadcast 129.159.115.255 groupname mp0  
bge1:1: flags=9040843<mtu 1500 index 6 inet 129.159.115.13 netmask ff000000  
broadcast 129.159.115.255
```

ホスト 2

```
bge0: flags=1000843<mtu 1500 index 3 inet 129.159.115.20 netmask ffffffff0  
broadcast 129.159.115.255 groupname mp0  
bge0:1: flags=9040843<mtu 1500 index 3 inet 129.159.115.21 netmask ff000000  
broadcast 129.159.115.255  
bge1: flags=1000843<mtu 1500 index 4 inet 129.159.115.22 netmask ffffffff0  
broadcast 129.159.115.255 groupname mp0  
bge1:1: flags=9040843<mtu 1500 index 4 inet 129.159.115.23 netmask ff000000  
broadcast 129.159.115.255
```

ここで、両方のホスト上の物理ネットワークインタフェースは、`bge0` および `bge1` として表示されています。『IP Network Multipathing Administration Guide』で説明されているように、`bge0:1` および `bge1:1` として表示されているのはマルチパステストインタフェースです(そのため、`ifconfig` 出力ではこれらのインタフェースが「非推奨」としてマークされている)。

この環境で HADB を設定するには、各ホストから 1 つの物理インタフェースアドレスを選択します。この例では、ホスト 1 からは `129.159.115.10` を、ホスト 2 からは `129.159.115.20` を選択します。ホストあたり 1 つのデータベースノードを含むデータベースを作成するには、`hadbm create` に次の引数を使用します。

```
--host 129.159.115.10,129.159.115.20
```

ホストあたり 2 つのデータベースノードを含むデータベースを作成するには、次の引数を使用します。

```
--host 129.159.115.10,129.159.115.20,129.159.115.10,129.159.115.20
```

どちらの場合も、両方のホストの `ma.server.mainternal.interfaces` 変数を `129.159.115.0/24` に設定してください。

4.4.1 から 4.4.2 へのオンラインアップグレード

オンラインで 4.2 または 4.3 から 4.4 にアップグレードすることはできません。ただし、4.4 の将来のバージョンではオンラインアップグレードがサポートされます。4.4.1 から 4.4.2 にアップグレードするには、次の手順を実行します。

1. すべての HADB ホストに 4.4.2 をインストールします。パスは 4.4.1 とは別のパス、たとえば `/opt/SUNWhadb/4.4.2-6` にします。
2. `hadbm` クライアントホストに新しいバージョンをインストールします。
3. HADB ホスト上で実行されているすべての管理エージェントを停止します。

4. 新しいバージョンのソフトウェアを使用して(ただし、設定ファイルは古いまま)、管理エージェントプロセスを起動します。残りの手順では、新しいバージョンの bin ディレクトリにある hadbm コマンドを使用してください。
5. 管理ドメインでパッケージを登録します。ここで、デフォルトのパッケージ名が V4.4 になるため、同じ名前を持つ既存のパッケージとの競合を避けるために別のパッケージ名が必要になる場合があります。

```
hadbm registerpackage --packagepath=/opt/SUNWhadb/4.4.2-6 V4.4.2
```

6. 新しいバージョンを使用してデータベースを再起動します。次のコマンドでは、ノードの順次再起動が実行されます。

```
hadbm set packagename=V4.4.2 database_name
```

7. データベースが「実行中」の状態にあり (hadbm status コマンドを使用して確認)、かつ正常に動作してクライアントトランザクションを処理していることを確認します。
8. すべてが正常に動作している場合は、あとで古いインストールを削除することができます。

古いパッケージの登録を解除する前に、古いパッケージへのすべての参照をマリアポジトリから削除します。そうしないと、「使用中のパッケージ」のために hadbm unregisterpackage が失敗します。たとえば、ダミーの再設定操作 hadbm set connectiontrace=<same_as_previous_value> によって、古いパッケージへのすべての参照が削除されます。ここで、古いパッケージの登録を解除します。

```
hadbm unregisterpackage [--hosts=<host_list>] <old_package_name>
```

HADB のインストール手順 (<http://clustra.norway.sun.com/intraweb/download/products/hadb/packages/pdf/4.4.2-6.pdf>) で説明されているように、ファイルシステムから古いインストールを削除します。

既知の SQL の制限事項

- テーブルに UNIQUE 二次インデックスを作成することはできません。
- 式 (DISTINCT 列) は、これが選択された唯一の式でないかぎり、収集式では許可されません。
- すべてのテーブルを、主キーを指定して作成する必要があります。つまり、主キーのないテーブルはサポートされていません。
- FULL OUTER JOIN はサポートされていません。
- テーブルサブクエリーである IN サブクエリーはサポートされていません。次に例を示します。

```
SELECT SNAME FROM S WHERE (S1#,S2#) IN (SELECT S1#,S2# FROM SP
WHERE P#='P2')
```

- NOT NULL と PRIMARY KEY 以外の制約はサポートされていません。
- リソースに新しい所有者を割り当てることができます。ただし、これを行う場合、現在の所有者に付与されている特権は新しい所有者に付与されません。
- 2つ以上の入れ子の NOT EXISTS サブクエリーで、各サブクエリーがクエリーの外側のレベルに (直接) 関連付けられていないものはサポートされていません。
- 列の特権はサポートされていません。
- 行の値コンストラクタは、VALUES 句でのみ許可されています。
- 行の値コンストラクタでは、サブクエリーは値式とは見なされません。
- 主キーを作成するとき、次のデータ型は使用できません。
 - REAL
 - FLOAT
 - DOUBLE PRECISION
 - DECIMAL
 - NUMERIC

高可用性ロードバランス

Application Server には、HTTP、IIOP、および JMS クライアント向けの負荷分散、HTTP セッションのフェイルオーバーのサポート、EJB クラスターリングおよびフェイルオーバーのサポート、高可用性 EJB タイマー、分散トランザクションリカバリ、アプリケーションのローリングアップグレードのサポート、および J2EE アプリケーションの一時的な状態を保存するための高可用性データベースが組み込まれています。

可用性により、クラスタ内の Application Server インスタンスのフェイルオーバー保護が可能になります。ある Application Server インスタンスがダウンすると、そのサーバーに割り当てられていたセッションを別の Application Server インスタンスが引き継ぎます。セッション情報は、HADB に格納されます。HADB は、HTTP セッションの持続性、ステートフルセッション Bean、およびシングルサインオン資格をサポートします。

Application Server 製品リリース

Application Server 製品は、さまざまな方法で提供されます。次の表に、さまざまな配布方法で提供される製品を示します。

Application Server 製品リリース	配布方法
Sun Java Enterprise System 内の Application Server Enterprise Edition コンポーネント	ファイルベースの配布 Sunsolve 経由でパッチのインストールが必要
Application Server Standard および Enterprise Edition スタンドアロン製品	ファイルベースおよびパッケージベースの配布

互換性の問題

Sun Java System Application Server Enterprise Edition の次のメジャーリリースでは、次に示す非互換性が導入されます。

- HTTP サービスでは、パフォーマンス向上のために引き続き DNS キャッシュが使用されますが、DNS キャッシュの監視は使用できなくなります。
- HTTP ファイルキャッシュに対するサポートが変更されるため、設定と監視に変更が発生します。
- アクセスログローテーションのサフィックスの形式が、<http://java.sun.com/j2se/1.5.0/docs/api/java/text/SimpleDateFormat.html> に指定されている、日付と時刻オブジェクトでサポートされている形式に変更されます。このリリースでのデフォルト値、「%YYYY;%MM;%DD;-%hh;h:mm;m:ss;s」は引き続きサポートされますが、その他の種類はサポートされません。
- サポートされなくなる `domain.xml` の要素、属性、およびプロパティはすべて、サーバーログでは警告として、またアップグレードログファイルでは非推奨としてフラグが付けられます。
- `server.http-service.dns` ノードは、監視ビューでは使用できなくなります。
- `server.http-service.file-cache` ノードの属性の一部は、削除される可能性があります。その結果、これらのノードから削除された属性にアクセスしようとする `asadmin` 監視コマンドはすべて失敗します。

Deploytool

Deploytool は使用できなくなります。これと等価な機能は NetBeans IDE にあります。移行に関する詳細とその計画方法については、<http://www.netbeans.org/kb/> から入手できる NetBeans 4.1 向けの J2EE 1.4 チュートリアルを参照してください。

ベリファイア

- ベリファイアの GUI モード (`verifier -u` で起動される) は使用できなくなります。これと等価な機能は NetBeans IDE にあります。

- ベリファイアツールを使用する場合のアプリケーション確認のデフォルトモードは、「J2EE ルールの確認」から「J2EE ルールおよび Sun Application Server 設定ルールの確認」に変更されます。つまり、ベリファイアはデフォルトでは、アプリケーションが J2EE ルールを満たしているかどうか、および Sun Application Server 上で動作するように設定されているかどうかをテストします。ベリファイアコマンドには、J2EE ルールのみに関してアプリケーションをテストするためのコマンド行スイッチが用意されます。

クラスローダの変更

現在のリリースでは、`domain.xml` (アプリケーションサーバーの設定ファイル) の `classpath-prefix`、`server-classpath`、および `classpath-suffix` 属性に追加された JAR およびディレクトリエントリは、JVM システムクラスパスでも使用できます。この動作に依存しているアプリケーションは、クラス `java.lang.ClassLoader` の次のメソッドを使用して、JVM システムクラスパスのクラスやその他のリソースにアクセスしている可能性があります。

- `getSystemClassLoader()`
- `getSystemResource()`
- `getSystemResourceAsStream()`
- `getSystemResources`

次のメジャーリリースでは、`classpath-prefix`、`server-classpath`、および `classpath-suffix` に追加された JAR およびディレクトリエントリは、JVM システムクラスパスでは使用できなくなります。アプリケーションが前述のいずれかのメソッドを使用している場合は、システムクラスパスでリソースが使用できることを前提としていない等価なメソッドを使用することを強くお勧めします。JVM システムクラスパスに依存しない等価なメソッドは、`java.lang.ClassLoader` にあり、可能な場合は使用するようになしてください。次に例を示します。

例 2-1 古いコード

```
java.net.URL url = ClassLoader.getSystemResource("com/acme/tools/tools.properties");
```

例 2-2 推奨される変更

```
java.net.URL url = this.getClass().getClassLoader().getResource("com/acme/tools/tools.properties");
```

コードを変更できない場合は、次のリリースで追加される、JVM システムクラスパスを設定するための新しい設定オプションの使用を選択することもできます。

Web サービスのセキュリティー設定

Web サービスのセキュリティーは、`wss-client-config.xml` および `wss-server-config.xml` ファイルを使用して設定できます。これらの設定ファイルの内容や名前は変更される可能性が高いことに注意してください。ただし、等価な機能は引き続き使用できます。

J2EE のサポート

Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 は、J2EE 1.4 プラットフォームをサポートしています。J2EE 1.4 プラットフォームで利用できる拡張 API を、次の表に示します。

表 2-5 J2EE 1.4 プラットフォームで使用可能な API

API	説明
コンポーネント	
Application および Application Client	XML スキーマによる標準配備記述子の実装
Enterprise JavaBeans (EJB) 2.1	タイマーサービスと EJB Web サービスエンドポイント
Java Servlet 2.4	Web サービスエンドポイントのフィルタ
JavaServer Pages (JSP) 2.0 アーキテクチャー	式言語とタグライブラリ
J2EE Connector Architecture 1.5	着信リソースアダプタと Java Message Service (JMS) プラグイン可能性
Web サービス	
Java Web Services Developer Pack 1.5	XML アプリケーション、Web サービス、および Web アプリケーションを構築、テスト、および配備するための統合ツールキット
Java API for XML-based Remote Procedure Calls (JAX-RPC) 1.1	WSDL と Java テクノロジーのマッピングと、Web サービスクライアントおよびエンドポイントの開発のサポート
WS-I Basic Profile 1.0	WSDL と SOAP による相互運用の有効化要素
SOAP with attachment API for Java (SAAJ) 1.2	SOAP ベースのメッセージングのための API で、ファイルの添付された SOAP メッセージの作成を促進します
Java APIs for XML Registries (JAXR) 1.0	Universal Description Discovery and Integration (UDDI および ebXML) などの XML レジストリにアクセスするための統一された標準 API
その他	
J2EE Deployment 1.1	J2EE のコンポーネントおよびアプリケーションの配備を可能にする標準 API

表 2-5 J2EE 1.4 プラットフォームで使用可能な API (続き)

J2EE Management 1.0	J2EE プラットフォームを管理するための情報モデルの定義
Java Management Extensions (JMX) 1.2	標準的な管理 API
Java Authorization Contract for Containers (JACC) 1.0	J2EE Application Server と 認証ポリシープロバイダとの間でのセキュリティ規約の定義
Java API for XML Processing (JAXP) 1.2	XML ドキュメントを解析および変換するための API で、XML スキーマの処理もサポートします
JMS 1.1	J2EE アプリケーションコンポーネントがメッセージを作成、送信、受信、および読み取りできるためのメッセージング標準で、キューとトピックのための統一された API もサポートします
JavaMail 1.3	メールシステムをモデル化する抽象クラスの集合で、API の小規模なアップデートも含まれます

高パフォーマンス

Application Server には、HTTP、IIOP、および JMS クライアント向けの負荷分散、HTTP セッションのフェイルオーバーのサポート、EJB クラスターリングおよびフェイルオーバーのサポート、高可用性 EJB タイマー、分散トランザクションリカバリ、アプリケーションのローリングアップグレードのサポート、および J2EE アプリケーションの一時的な状態を保存するための高可用性データベースが組み込まれています。

可用性により、クラスタ内の Application Server インスタンスのフェイルオーバー保護が可能になります。ある Application Server インスタンスがダウンすると、そのサーバーに割り当てられていたセッションを別の Application Server インスタンスが引き継ぎます。セッション情報は、HADB に格納されます。HADB は、HTTP セッションの持続性、ステートフルセッション Bean、およびシングルサインオン資格をサポートします。

スケーラビリティ

Application Server は、サーバーインスタンスのクラスタ化と要求のロードバランスによる水平方向のスケーラビリティをサポートします。同時に、マルチプロセッサの大規模マシンをサポートする最高級の垂直方向スケーラビリティも実現します。統合メッセージブローカは、より高度なスケーラビリティと可用性のためにクラスタ化できます。HTTP クライアント、RMI/IIOP ベースのリッチクライアントアプリケーション、Web サービスクライアント、および JRM クライアントからのクライアントアクセスは、Application Server クラスタに負荷分散できます。

JavaServer Faces 1.1 のサポート

Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 は、JavaServer Faces 1.1 テクノロジをサポートしています。JavaServer Faces テクノロジは、自身の状態、イベント、ハンドリング、および入力チェックを管理するユーザーインターフェースコンポーネントに対応する一連のサーバーサイド API から成ります。これらの API は、ページナビゲーションを規定し、国際化とアクセシビリティをサポートします。JSP のカスタムタグライブラリを使用して、カスタム UI コンポーネントを追加できます。

JavaServer Faces テクノロジで開発している間、開発チームの各メンバは、処理の一部にだけ集中することができます。単純なプログラミングモデルでは、これらの部分をつなぎ合わせるにより、ずっと効率的でシンプルな開発サイクルが実現されます。

既知の問題点と制限事項

この章では、Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 ソフトウェアに関する既知の問題とそれに関連する回避策について説明します。問題の説明にプラットフォームが明記されていない場合、その問題はすべてのプラットフォームに当てはまります。この節は次の項目から構成されています。

- 44 ページの「管理」
- 48 ページの「Apache とロードバランサプラグイン」
- 50 ページの「アプリケーションクライアント」
- 51 ページの「付属の Sun JDBC ドライバ」
- 54 ページの「コネクタ」
- 55 ページの「マニュアル」
- 57 ページの「高可用性」
- 63 ページの「インストール」
- 65 ページの「J2EE Tutorial」
- 66 ページの「ライフサイクル管理」
- 67 ページの「ロギング」
- 67 ページの「メッセージキュー」
- 68 ページの「監視」
- 70 ページの「PointBase」
- 71 ページの「サンプル」
- 74 ページの「セキュリティ」
- 75 ページの「アップグレードユーティリティ」
- 79 ページの「Web コンテナ」

管理

ここでは、管理上の既知の問題とその解決方法を示します。

バグ ID	サマリー
6171458	<p>domain1 がない場合に package-appclient スクリプトが機能しない。</p> <p>デフォルトでは、\$INSTALL/lib/package-appclient.xml に、asenv.conf に よってポイントされる domain1 の AS_ACC_CONFIG 変数用にハードコードされた 値があります。domain1 を削除して新たなドメインを作成した場合、 AS_ACC_CONFIG 変数は新たなドメイン名で更新されません。その結果、 package-appclient スクリプトの処理が失敗します。</p> <p>解決法</p> <p>次のいずれかの操作を行います。</p> <ol style="list-style-type: none">1. domain1 はそのままにしておき、その前後に別のドメインを作成します。2. domain1 を削除し、\$INSTALL/lib/package-appclient.xml で domain1 用に ハードコードされた値を、新たなドメイン名で置き換えます。 <p>domain1 がない場合、新たなドメインが作成されるたびにこれを行う必要があ ります。</p>
6196993	<p>バックアップ取得したドメインを別の名前でも復元できない。</p> <p>同一の Application Server 上でのドメインのミラー化は、backup-domain および restore-domain コマンドでは行えません。asadmin restore-domain コマンドに はドメインをリネームするオプションがありますが、元の名前とは違う名前 でドメインを復元することはできないからです。バックアップ取得したドメ インのリネームは正常に行われたように見えますが、そのリネームされたド メインの起動は失敗します。ドメイン設定のエントリは変更されておらず、 startserv および stopserv は元のドメイン名を使用してパスを設定するからで す。</p> <p>解決法</p> <p>restore-domain で使用するドメイン名は、元の backup-domain コマンドで使用 したドメイン名と同じである必要があります。Application Server 8.1 での backup-domain および restore-domain コマンドは、同一マシン上の同一ドメ インのバックアップおよび復元についてだけ有効です。</p>

バグID	サマリー
6200011	<p>JMX エージェントを伴う Application Server の起動がサポートされていない。</p> <p>Application Server では、J2SE 1.4.x または 5.0 以降を設定できます。J2SE 5.0 プラットフォームの重要な特徴は、JMX エージェントを起動できることです。サーバーの起動時にシステムプロパティーを明示的に設定すると、JMX エージェントがアクティブになります。</p> <p>次に例を示します。</p> <pre>name="com.sun.management.jmxremote" value="true" name="com.sun.management.jmxremote.port" value="9999" name="com.sun.management.jmxremote.authenticate" value="false" name="com.sun.management.jmxremote.ssl" value="false"</pre> <p>JMX プロパティーを設定してからサーバーを起動すると、Application Server VM 内に新たな jmx-connector サーバーが起動します。この場合は、望ましくない副作用の1つとして、管理機能が悪影響を受け、Application Server の管理コンソールやコマンド行インタフェースで予期しない結果が発生することがあります。問題は、組み込みの jmx-connector サーバーと新たな jmx-connector サーバーとの間で衝突が発生することにあります。</p> <p>解決法</p> <p>jconsole または何らかの JMX 互換クライアントを使用する場合には、Application Server とともに起動する標準の JMX コネクタサーバーを再利用することを検討してください。</p> <p>サーバーの起動時に、次に示すような行が server.log に作成されます。ここで指定されている JMXService の URL に接続し、資格を正常に指定した後、同様の管理および設定操作を実行することができます。次に例を示します。</p> <pre>[# 2004-11-24T17:49:08.203-0800 INFO sun-appserver-ee8.1 javax. enterprise.system.tools.admin _ThreadID=10; ADM1501: Here is the JMXServiceURL for the JMXConnectorServer: [service:jmx:rmi: ///jndi/rmi://hostname:8686/management/rmi-jmx-connector]. This is where the remote administrative clients should connect using the JSR 160 JMX Connectors. #]</pre> <p>詳細は、『管理ガイド』を参照してください。</p>

バグ ID	サマリー
6206176	<p>UNIX で、Application Server の start および stop スクリプトに関する実行権に過度の制限がかけられている。</p> <p>ユーザー「A」としてログインして <code>asadmin restore-domain</code> コマンドを実行すると、そのスクリプトのアクセス権は <code>744 (rwxr--r--)</code> になります。そのあとでユーザー「B」としてドメインを起動または停止しようとする、たとえば「B」が <code>root</code> であっても、その試みは失敗します。ユーザー「A」についてだけスクリプトが実行可能だからです。</p> <p>解決法</p> <p>スクリプトのアクセス権を次のようにして変更します。</p> <pre>chmod 755 appserv/domains/domain-name/bin/*</pre>
6236544、6275436	<p>どの Web サービスのエンドポイント URL を使用しても、ロードバランサの設定ファイルが作成されない。</p> <p>Web サービスの URL をエクスポートする EJB モジュールを含むアプリケーションを使用してロードバランサを設定しても、作成された <code>loadbalancer.xml</code> ファイルに、その Web サービスのコンテキストルートが存在しません。</p> <p>解決法</p> <ol style="list-style-type: none">1. <code>loadbalancer.xml</code> ファイルを編集して、作成されなかった Web モジュールを次のように追加します。<pre><web-module context-root="context-root-name" disable-timeout-in-minutes="30" enabled="true"/></pre>2. <code>context-root-name</code> 値を、EJB として公開された Web サービスのコンテキストルート名に置き換えます。
6288893	<p><code>sun-appserv-admin</code> を使用して Application Server を再起動すると、<code>LoginException</code> エラーが発生する。</p> <p>解決法</p> <ol style="list-style-type: none">1. 既存の <code><as_install>/bin/asant</code> スクリプトの名前を <code>asant.bak</code> に変更します。2. <code><as_install>/lib/install/templates/ee</code> (SE/EE バージョンの場合) にある <code>asant.template</code> ファイルを <code><as_install>/bin/</code> ディレクトリにコピーし、このファイルの名前を <code>asant</code> に変更します。3. 新しくコピーされた <code><as_install>/bin/asant</code> スクリプトを編集して、<code>%CONFIG_HOME%</code> トークンを <code><as_install>/config</code> に置き換えます。4. 元の <code>asant.bak</code> ファイルに対して行なった手作業の変更がある場合は、それを新しい <code>asant</code> スクリプトに結合します。

バグID	サマリー
6315957	<p>Application Server のマニュアルに <code>.asadmintruststore</code> ファイルが記述されていない。このファイルがサーバー管理者の <code>home</code> ディレクトリに存在しないと、そのサーバー上にホストされている特定のアプリケーションをアップグレードしたときに重大なバグが発生する場合があります。</p> <p>解決法</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 可能であれば、そのサーバーをインストールしたユーザーが <code>asadmin start-domain domain1</code> コマンドを実行してください。 ■ そのユーザーがこのコマンドを実行できない場合は、<code>.asadmintruststore</code> を、インストールしたユーザーの <code>home</code> ディレクトリから実行中のユーザーの <code>home</code> ディレクトリに移動またはコピーしてください。 ■ このファイルをインストールユーザーの <code>home</code> ディレクトリから実行中のユーザーの <code>home</code> ディレクトリに (コピーではなく) 移動した場合は、アップグレードまたはインストールしたユーザーのホームディレクトリ (Java ES では、通常 <code>root</code>) に <code>.asadmintruststore</code> ファイルが存在しなくなるため、バグ 6309079、6310428、および 6312869 で説明されているようなアプリケーションのアップグレードに関する問題が発生する可能性があることに注意してください。
6462903	<p>「保存」 ボタンを複数回クリックすると、Application Server 8.1 管理 GUI でエラーが発生する。</p> <p>サーバーインスタンスの HTTP ポート値を変更する場合、ポート変更を行う前にサーバーインスタンスを起動するか、サーバーインスタンスがダウンしている場合は「保存」 ボタンを 1 度だけクリックします。</p>
6506605	<p><code>asadmin multimode</code> がマスターパスワードをキャッシュしているように見える。</p> <p><code>asadmin</code> を <code>multimode</code> で実行すると、次の一連の操作が失敗します。</p> <pre>create-domain start-domain stop-domain delete-domain create-domain</pre> <p>最後の <code>create-domain</code> では次のエラーが発生します。</p> <pre>Invalid database password. CLI130 Could not create domain, domain2</pre> <p>この問題は JDK の制限事項によって生じます。</p> <p>解決法</p> <p><code>asadmin multimode</code> で単一の Java VM に複数のドメインを作成しないでください。<code>asadmin multimode</code> を使用して、マスターパスワードが異なる 2 つのドメインを作成または起動することはできません。</p>

Apache とロードバランサプラグイン

ここでは、Apache Web Server およびロードバランサプラグインに関する既知の問題と、それに関連する解決法を示します。

バグ ID	サマリー
6306784	<p>『高可用性 (HA) 管理ガイド』に、Apache で openssl を使用する場合は、誤った手順が記載されている。</p> <p>解決法</p> <p>openssl のコンパイルと作成を行う場合は、次のコマンドを実行します。</p> <pre>cd openssl-0.9.7e</pre> <pre>config</pre> <pre>make</pre> <p>また、Apache 1.3 では、mod_ssl ソースのディレクトリ名も、使用している Apache のリリースに応じて変わります。たとえば、Apache 1.3.33 の場合、この名前は mod_ssl-2.8.22-1.3.33 になります。</p>
6307976	<p>『高可用性 (HA) 管理ガイド』に、Apache 2.0 で証明書を使用するための手順が記載されていない。</p> <p>解決法</p> <p>Apache のセキュリティーを実行するには、証明書を使用する必要があります。認証局から証明書を取得するための手順については、modssl FAQ (http://www.modssl.org/docs/2.8/ssl_faq.html#ToC24) にある証明書に関する情報を参照してください。</p>

バグID	サマリー
6308021	<p>Apache Web Server をルートとして起動する必要がある。</p> <p>解決法</p> <p>Solaris では、Application Server がルートの下にインストールされている場合、Apache Web Server をルートとして起動する必要があります。Java Enterprise System は、ルートとしてインストールされます。Apache 2.0 の場合、ルートとして起動された後、Apache はユーザーが指定した別のユーザーに切り替えて動作します。そのユーザーは、<code>/conf/httpd.conf</code> ファイルで指定します。多くのシステムでは、ルートとして起動するには、<code>httpd.conf</code> ファイルを編集して正しいグループを指定する必要があります。次の行を置き換えます。</p> <p>Group #-1</p> <p>次の行に置き換えます。</p> <p>Group nobody</p> <p>ユーザーおよびグループの使用に関する詳細情報は、<code>httpd.conf</code> ファイルに記載されています。</p>
6308043	<p>Solaris で Apache Web Server 2.0 とともに <code>openssl</code> を使用するための手順への追加。</p> <p>Apache 2.0 とロードバランサプラグインをインストールした後、<code>ssl.conf</code> と <code>ssl-std.conf</code> を次のように編集します。</p> <p>次の行を置き換えます。</p> <pre><VirtualHost _default_:9191></pre> <p>次の行に置き換えます。</p> <pre><VirtualHost machine_name:9191></pre> <p>ここで <code>machine_name</code> はマシンの名前であり、9191 はセキュリティーポート番号です。</p>
6338687	<p>ロードバランサプラグインの URL/URI 制限 = 8K。</p> <p>Application Server 8.1 Update 2 のロードバランサプラグインで解析できる URL/URI の長さには、8K のハードコードされた制限があります。</p> <p>解決法</p> <p>長さが 8K を超える URL または URI を作成し、ロードバランサプラグインを使用して Application Server に送信することは避けてください。</p>

バグID	サマリー
6406884	<p>Application Server 8.1 UR2 とともに IIS6 およびロードバランサプラグインを使用する場合の問題。</p> <p>解決法</p> <p>Application Server 8.1UR2 とともに IIS6 およびロードバランサプラグインを使用するには、次の追加設定手順を行う必要があります。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. <code>appserver-install-location/lib</code> をシステム PATH 変数に追加し、マシンを再起動します。 2. Microsoft Technet の記事「Requests for dynamic content return 404 error (IIS 6.0)」(http://www.microsoft.com/technet/prodtechnol/WindowsServer2003/Library/IIS/c4a9401e-26be-4c49-bd4d-4326b1da) の説明に従って、不明な Web サービス拡張機能を有効にします。 3. ファイル <code>inetput/wwwroot/sun-passthrough/lb.log</code> で、NTFS の書き込みおよび変更権限をグループ <code>IIS_WPG</code> に与えます。IIS 6.0 はワーカープロセス分離モードで実行し、グループ <code>IIS_WPG</code> のセキュリティー権限で IIS サーバーを実行するので、この権限が必要になります。このファイルを作成してから、そのファイルを右クリックしてセキュリティーアクセス権を設定する必要があります。 <p>ISAPI フィルタの状態が緑に変わらない場合は、任意の http 要求を IIS http ポートに送信してみて(ここでは失敗してもかまわない)、Web サイトを右クリックし、プロパティーを選択して ISAPI フィルタをチェックしてください。</p>

アプリケーションクライアント

ここでは、アプリケーションクライアントに関する既知の問題とその解決方法を示します。

バグID	サマリー
6193556	<p>アプリケーションクライアントアーカイブのライブラリ JAR が MANIFEST ファイルを上書きする。</p> <p>クライアント JAR (たとえば <code>reporter.jar</code>) 内に最上位レベルの JAR ファイルがある場合、クライアント JAR を配備すると、その JAR の MANIFEST ファイルがクライアント JAR の MANIFEST ファイルを上書きします。</p> <p>解決法</p> <p>現時点ではありません。</p>

バグ ID	サマリー
6373043	<p>CGI-bin や SHTML などの動的コンテンツ技術はサポートされなくなりました。</p> <p>解決法</p> <p>JSP および Web サービス技術を代わりに使用します。</p>

付属の Sun JDBC ドライバ

ここでは、Sun の JDBC ドライバに関する既知の問題とその解決方法を示します。

バグ ID	サマリー
6165970	<p>TRANSACTION_SERIALIZABLE 遮断レベルを Microsoft SQL Server 向けの付属の Sun ドライバとともに使用するアプリケーションは、2つの並行トランザクションが実行されていて、その1つがロールバックされた場合、準備されているステートメントを使用して更新するときにハングアップすることがある。</p> <p>希望の遮断レベルを接続に対して設定するには、対応する接続プールをその遮断レベルで作成する必要があります。接続プールの設定の詳細は、『管理ガイド』を参照してください。</p> <p>解決法</p> <p>現時点ではありません。</p>

バグ ID	サマリー
6170432	<p data-bbox="496 215 872 232">PreparedStatement エラーが発生する。</p> <p data-bbox="496 256 565 274">説明 #1</p> <p data-bbox="496 298 1283 350">1つのトランザクションで3000を超える PreparedStatement オブジェクトを生成する場合、DB2 では次のエラーが発生する可能性があります。</p> <p data-bbox="496 374 1283 427">[sunm][DB2 JDBC Driver] No more available statements. Please recreate your package with a larger dynamicSections value.</p> <p data-bbox="496 447 586 465">解決法 #1</p> <p data-bbox="496 489 1283 541">次のプロパティを接続プール定義に追加して、ドライバが DB2 パッケージをより大きな動的セクション値に再バインドするようにします。</p> <p data-bbox="496 565 1200 583">createDefaultPackage=true replacePackage=true dynamicSections=1000</p> <p data-bbox="496 607 1158 624">接続プールの設定の詳細は、『管理ガイド』を参照してください。</p> <p data-bbox="496 649 565 666">説明 #2</p> <p data-bbox="496 690 1283 743">前述の PrepardStatement エラーに関連して、次のエラーメッセージがスローされることがあります。</p> <p data-bbox="496 767 1283 819">[sunm][DB2 JDBC Driver][DB2]Virtual storage or database resource is not available.</p> <p data-bbox="496 840 586 857">解決法 #2</p> <p data-bbox="496 881 1283 933">DB2 サーバー設定パラメータ <i>APPLHEAPSZ</i> の値を増やします。適度な値は 4096 です。</p> <p data-bbox="496 958 565 975">説明 #3</p> <p data-bbox="496 999 1283 1104">遮断レベル TRANSACTION_SERIALIZABLE。アプリケーションが遮断レベル TRANSACTION_SERIALIZABLE を採用し、前述したパラメータの1つを使用している場合、そのアプリケーションは接続を取得するときにハングアップすることがあります。</p> <p data-bbox="496 1124 586 1142">解決法 #3</p> <p data-bbox="496 1166 1283 1253">希望の遮断レベルを接続に対して設定するには、対応する接続プールをその遮断レベルで作成する必要があります。その手順については、『管理ガイド』を参照してください。</p>

バグ ID	サマリー
6189199	<p data-bbox="556 208 1328 260">Sybase Adaptive Server 用の付属の Sun ドライバでの遮断レベルの設定にかかわる問題。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li data-bbox="556 269 1328 451">■ TRANSACTION_SERIALIZABLE 遮断レベルを Sybase Adaptive Server 向けの付属の Sun ドライバとともに使用するアプリケーションは、2つの並行トランザクションが実行されていて、その1つがロールバックされた場合、準備されているステートメントを使用して更新するときにハングアップすることがあります。接続ロールバックは次のメッセージとともに失敗し、ロールバックされた接続はそれ以降は使用できません。 <pre data-bbox="592 460 1292 512">java.sql.SQLException: [sunm][Sybase JDBC Driver]Request cannot be submitted due to wire contention</pre> <li data-bbox="556 529 1328 685">■ Sybase Adaptive Server は TRANSACTION_REPEATABLE_READ 遮断レベルをサポートしません。ただし、DatabaseMetaData をクエリーすると、付属の Sun ドライバは、この遮断レベルがこのデータベースによってサポートされると返答します。この遮断レベルを使用するアプリケーションは処理に失敗します。 <li data-bbox="556 703 1328 928">■ 付属の Sun ドライバを使用するアプリケーションは、TRANSACTION_READ_UNCOMMITTED 遮断レベルを設定できません。DatabaseMetaData に対する最初のアクセスの時点で、アプリケーションは次の例外をスローします。 <pre data-bbox="592 833 1328 920">java.sql.SQLException: [sunm][Sybase JDBC Driver][Sybase]The optimizer could not find a unique index which it could use to perform an isolation level 0 scan on table 'sysystemprocs.dbo.spt_server_info'.</pre> <p data-bbox="556 937 628 963">解決法</p> <p data-bbox="556 980 792 1006">現時点ではありません。</p>
6247468	<p data-bbox="556 1032 1328 1085">Solaris 10 および Enterprise Linux 3.0 で、Sun に付属している Oracle JDBC ドライバでは接続を作成できない。</p> <p data-bbox="556 1102 628 1128">解決法</p> <p data-bbox="556 1145 1313 1206">Sun JDBC Oracle データソース (com.sun.sql.jdbcx.oracle.OracleDataSource) を使用する場合は、JDBC 接続プールに次のプロパティを設定します。</p> <pre data-bbox="556 1223 1049 1249"><property name="serverType" value="dedicated"/></pre> <p data-bbox="556 1267 1320 1345">このプロパティの値は、Oracle サーバーのリスナーの設定方法によって異なります。「共有」モードで設定した場合は、上の値を「dedicated」に変更する必要があります。</p>

コネクタ

この節では、J2EE のコネクタアーキテクチャーに関する既知の問題とその解決方法を示します。

バグID	サマリー
6188343	<p>DAS インスタンスを再起動したあと、<code>cascade</code> が <code>false</code> に設定されている場合にコネクタモジュールの配備取り消しが失敗する。</p> <p>このシナリオでは、スタンドアロンまたは埋め込みのコネクタモジュールが DAS とコネクタ接続プールに配備され、その配備済みモジュール用にリソースが作成されます。DAS インスタンスを再起動したあと、<code>cascade</code> が <code>false</code> に設定されている場合にコネクタモジュールの配備取り消しが次の例外で失敗します。</p> <pre>[# 2004-10-31T19:52:23.049-0800 INFO sun-appserver-ee8.1 javax.enterprise.system .core_ThreadID=14; CORE5023:Error while unloading application [foo] #]</pre> <p>解決法</p> <p>DAS インスタンスを再起動したあとは、スタンドアロンまたは埋め込みのコネクタの配備を取り消すために、カスケード式配備取り消しを使用 (<code>cascade</code> オプションを <code>true</code> に設定) します。</p>
6412132	<p>接続プーリングに <code>JDBC.getConnection()</code> を使用する場合。</p> <p>Application Server JDBC 接続プールから接続を取得し、<code>Statement</code> オブジェクトを作成してから <code>Statement.getConnection</code> メソッドを使用すると、そのステートメントはラップ接続ではなく物理接続を返します。この物理接続を閉じたときに接続プールロジックが破壊されます。この問題を回避するには、<code>domain.xml</code> ファイルで次の JVM プロパティを設定してください。</p> <pre><jvm-options>-Dcom.sun.appserv.jdbc.wrapJdbcObjects=truejvm-options>-Dcom.sun.appserv.jdbc .wrapJdbcObjects=true></pre>
6412148	<p><code>ORBCommunicationsRetryTimeout</code> エラー。</p> <p><code>ORBCommunicationsRetryTimeout</code> プロパティは、ORB クライアントが到達不可能な ORB バックエンドへの接続の確立を試行する秒数を指定します。デフォルト値は 60 秒です。このデフォルト設定を使用した場合、ORB バックエンドに到達できないときに、ログには多数の CORBA 例外とともに高いネットワーク使用率が表示されることがあります。</p> <p>解決法</p> <p><code>ORBCommunicationsRetryTimeout</code> の値を低くします。</p>

マニュアル

ここでは、マニュアル上の既知の問題とその解決方法を示します。

バグID	サマリー
さまざまなID	<p>Javadoc に不整合がある。</p> <p>いくつかの AMX インタフェースおよびメソッドについて、Javadoc が欠けているか間違っています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ NumConnAcquired および NumConnReleased 統計情報の取得メソッドが ConnectorConnectionPoolStats および AltJDBCConnectionPoolStats から抜けている。これらの取得メソッドは、将来のリリースで <code>getNumConnAcquired()</code> および <code>getNumConnReleased()</code> として追加される予定。 ■ EJBCacheStats 内でメソッド <code>getPassivationSuccesses()</code>、<code>getExpiredSessionsRemoved()</code>、<code>getPassivationErrors()</code>、<code>getPassivations()</code> を呼び出すと、例外がスローされる。これは将来のリリースで解決される予定。 ■ サーバーを起動したあと、すべての AMX MBeans が登録されて利用できるようになるまでに数秒を要することがある。将来のリリースでは、AMX MBeans が完全にロードされたことを確認できるようになる予定。 ■ 定数 <code>XTypes.CONNECTOR_CONNECTION_POOL_MONITOR</code> のスペルが間違っている ("NNN" の部分)。これは将来のリリースで訂正される予定。
6219689	<p>ConnectionPoolStats API ドキュメントでのエラー。</p> <p><code>install_dir/docs/api</code> にある API ドキュメントでは次のように記述していません。</p> <pre>public CountStatistic getNumConnFree()</pre> <p>このエントリは次のように読み替えてください。</p> <pre>public RangeStatistic getNumConnFree()</pre>
6265624	<p>付属の ANT によって <code>java.lang.NoClassDefFoundError</code> がスローされる。</p> <p>スレッド「main」で <code>java.lang.NoClassDefFoundError: org/apache/tools/ant/launch/Launcher</code> の例外がスローされます。</p> <p>解決法</p> <p>付属の ANT を Application Server 外部のアクティビティに使用することはお勧めできません。</p>

バグ ID	サマリー
6482223	<p data-bbox="475 213 1265 262">新しい JMS 接続ファクトリを作成するときのデフォルト値がオンラインヘルプとマニュアルで異なる。</p> <p data-bbox="475 284 1265 362">新しい JMS 接続ファクトリを作成する場合、接続ファクトリのデフォルト値のリストがオンラインヘルプと『管理ガイド』で異なっています。具体的には、オンラインヘルプでは次のように示されています。</p> <pre data-bbox="475 395 896 683"> ===== ReconnectAttempts : 6 UserName : guest ReconnectInterval : 30000 ReconnectEnabled : false Password : guest ClientId : AddressListBehavior : PRIORITY AddressListIterations : -1 AddressList : 7676 ===== </pre> <p data-bbox="475 708 955 732">『管理ガイド』では次のように示されています。</p> <pre data-bbox="475 765 896 1055"> ===== ReconnectAttempts : 3 UserName : guest ReconnectInterval : 30000 ReconnectEnabled : true Password : guest ClientId : AddressListBehavior : RANDOM AddressListIterations : 3 AddressList : 7676 ===== </pre>
	<p data-bbox="475 1078 544 1102">解決法</p> <p data-bbox="475 1121 822 1144">『管理ガイド』が正しい情報です。</p>
6486123	<p data-bbox="475 1173 1226 1196">ラップ接続からの物理接続の取得に関するマニュアルが正しくなくなった。</p> <p data-bbox="475 1218 1265 1378">他のバグ (6295215 など) の結果、『Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 Developer's Guide』の第 11 章「Using the JDBC API for Database Access」の『Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 Developer's Guide』の「Obtaining a Physical Connection from a Wrapped Connection」の節で示されているコードは正しくなくなっています。具体的には、次の行を</p> <pre data-bbox="475 1402 961 1425"> Connection drivercon = ds.getConnection(con); </pre> <p data-bbox="475 1442 776 1465">次の行に読み替えてください。</p> <pre data-bbox="475 1489 1288 1512"> Connection drivercon = ((com.sun.gjc.spi.DataSource)ds).getConnection(con); </pre>

バグID	サマリー
6511489	<p>KeepAliveFlushes と KeepAliveRefusals の説明に必要な追加情報。</p> <p>『Application Server Tuning Guide』には、KeepAliveFlushes と KeepAliveRefusals に関する次の追加情報が必要です。</p> <p>現在のバージョンの Application Server では、KeepAliveCount が MaxKeepAliveConnections を上回ると、サーバーは既存の接続を閉じません。この代わりに、新しいキープアライブ接続が拒否され、KeepAliveRefusals のカウントが増えます。</p>

高可用性

ここでは、高可用性データベース (HADB) に関する既知の問題とその解決方法を示します。

バグID	サマリー
ID なし	<p>ダブルネットワークでの HADB 設定。</p> <p>2つのサブネット上にダブルネットワークで設定された HADB は、Solaris SPARC 上では正常に動作します。しかし、一部のハードウェアプラットフォームでのオペレーティングシステムまたはネットワークドライバの問題が原因で、Solaris x86 および Linux プラットフォームではダブルネットワークを適切に処理できない場合があります。これにより、HADB について次の問題が発生します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Linux では、メッセージ送信の際に HADB プロセスがブロックされることがある。これにより、HADB ノードが再起動し、ネットワークパーティションが発生する。 ■ Solaris x86 では、ネットワーク障害が発生した場合、もう一方のネットワークインタフェースへの切り替えを妨げる問題が発生することがある。この問題は常に発生するとは限らないため、ネットワークが1つしかないよりも2つあった方が安全である。この問題は、Solaris 10 で部分的に解決されている。 ■ トランキングがサポートされない。 ■ Microsoft Windows 2003 では、HADB はダブルネットワークをサポートしていない (ID 5103186)。

バグID	サマリー
IDなし	<p>HADB データベースの作成が失敗する。</p> <p>新しいデータベースを作成すると、使用可能な共有メモリーセグメントが少なすぎるという、次のエラーで失敗することがあります。</p> <pre>HADB-E-21054:System resource is unavailable:HADB-S-05512:Attaching shared memory segment with key "xxxxx" failed, OS status=24 OS error message:Too many open files.</pre> <p>解決法</p> <p>共有メモリーが設定されており、その設定が機能していることを確認します。特に、Solaris 8 では、<code>/etc/system</code> ファイルを調べて、変数 <code>shmsys:shminfo_shmseg</code> の値がホストあたりのノード数の6倍以上になっていることを確認します。</p>
5091280	<p>リソース (ディスクおよびメモリースペース) が利用可能かどうかを <code>hadbm set</code> がチェックしない。</p> <p><code>hadbm set</code> を使用してデバイスまたはバッファのサイズを増やす場合、管理システムは、データベースの作成やノードの追加の際にはリソースが利用可能かどうかをチェックしますが、デバイスまたはメインメモリーのバッファサイズを変更するときには利用可能なリソースが十分にあるかどうかをチェックしません。</p> <p>解決法</p> <p>設定属性 <code>devicesize</code> または <code>buffersize</code> を増やす前に、すべてのホスト上にディスクおよびメモリーの空きスペースが十分にあることを確認してください。</p>
5091349	<p><code>packagepath</code> の混在パスがサポートされない。</p> <p>同一のソフトウェアパッケージを、同じ名前での別のホストの別の位置で登録することはできません。次に例を示します。</p> <pre>hadbm registerpackage test --packagepath=/var/install1 --hosts europa11 Package successfully registered. hadbm registerpackage test --packagepath=/var/install2 --hosts europa12 hadbm:Error 22171: A software package has already been registered with the package name test.</pre> <p>解決法</p> <p>HADB は、データベースクラスタ内のノードをまたがる混在パスをサポートしません。HADB サーバーのインストールディレクトリ (<code>---packagepath</code>) は、すべての参加ホストについて同一にしてください。</p>

バグID	サマリー
6173886、6253132	<p data-bbox="546 213 915 234"><code>createdomain</code> が失敗することがある。</p> <p data-bbox="546 253 1343 336">複数のネットワークインタフェースを備えたホスト上で管理エージェントを実行している場合に、すべてのネットワークインタフェースが同じサブネット上に存在しないと、<code>createdomain</code> コマンドが失敗することがあります。</p> <p data-bbox="546 361 1305 409"><code>hadbm:Error 22020: The management agents could not establish a domain, please check that the hosts can communicate with UDP multicast.</code></p> <p data-bbox="546 428 1319 536">管理エージェントは、特に設定されていないかぎり、UDP マルチキャスト用の「最初の」インタフェース(この「最初」は、<code>java.net.NetworkInterface.getNetworkInterfaces()</code> の結果によって定義される)を使用します。</p> <p data-bbox="546 557 615 578">解決法</p> <p data-bbox="546 598 1336 765">もっとも良い解決法は、使用するサブネットを管理エージェントに通知することです。たとえば、設定ファイル内の <code>ma.server.maininternal.interfaces</code> を <code>ma.server.maininternal.interfaces=10.11.100.0</code> に設定します。あるいは、サブネット間のルーターを、マルチキャストパケットをルーティングするように設定することもできます。このとき、管理エージェントはマルチキャストアドレス <code>228.8.8.8</code> を使用します。</p> <p data-bbox="546 784 1336 951">管理エージェントの新しい設定を再試行する前に、管理エージェントリポジトリのクリーンアップが必要になる場合があります。ドメイン内のすべてのエージェントを停止し、リポジトリディレクトリ(管理エージェント設定ファイル内の <code>repository.dr.path</code> で識別される)内のすべてのファイルとディレクトリを削除します。この操作は、新しい設定ファイルを使用してエージェントを再起動する前に、すべてのホスト上で実行する必要があります。</p>

バグID	サマリー
6230792、6230415	<p>HADBの起動、停止、および再設定が失敗またはハングアップすることがある。</p> <p>Solaris 10 Opteron では、<code>hadbm</code> コマンドを使用して HADB を起動、停止、または再設定すると、次のいずれかのエラーで失敗またはハングアップする場合があります。</p> <pre>hadbm:Error 22009: The command issued had no progress in the last 300 seconds. HADB-E-21070: The operation did not complete within the time limit, but has not been cancelled and may complete at a later time.</pre> <p>このエラーは、<code>clu_noman_srv</code> プロセスが使用するファイル (<code>nomandevic</code>) への読み取り/書き込みに不整合があった場合に発生することがあります。この問題は、HADB 履歴ファイルで次のメッセージを検索することにより検出できません。</p> <pre>n:3 NSUP INF 2005-02-11 18:00:33.844 p:731 Child process noman3 733 does not respond. n:3 NSUP INF 2005-02-11 18:00:33.844 p:731 Have not heard from it in 104.537454 sec. n:3 NSUP INF 2005-02-11 18:00:33.844 p:731 Child process noman3 733 did not start.</pre> <p>解決法</p> <p>問題を手動で再現できていないため、次の回避策はまだ検証されていません。ただし、影響を受けるノードに対してこのコマンドを実行すれば、問題は解決されます。</p> <pre>hadbm restartnode --level=clear <i>nodeno dbname</i></pre> <p>ノードのすべてのデバイスが再初期化されるわけではないことに注意してください。再初期化する前に、ノードの停止が必要になる場合があります。</p>
6232140	<p>管理エージェントが、例外「<code>IPV6_MULTICAST_IF failed</code>」で終了する。</p> <p>複数の NIC カードが実装された、Solaris 8 を実行しているホスト上で起動されている場合、IPv6 と IPv4 が有効になったカードが混在していると、管理エージェントが例外「<code>IPV6_MULTICAST_IF failed</code>」で終了することがあります。</p> <p>解決法</p> <p>環境変数 <code>JAVA_OPTIONS</code> を <code>-Djava.net.preferIPv4Stack=true</code> に設定します。次に例を示します。</p> <pre>export JAVA_OPTIONS="-Djava.net.preferIPv4Stack=true"</pre> <p>あるいは、この問題が発生しない Solaris 9 以降を使用します。</p>

バグID	サマリー
6249685	<p>clu_trans_srv を中断できない。</p> <p>Red Hat Enterprise Linux 3.0 の 64 ビットバージョンには、非同期入出力の実行中に clu_trans_srv プロセスを中断不可能なモードに陥らせるバグが存在します。つまり、kill -9 が機能せず、オペレーティングシステムの再起動が必要になります。</p> <p>解決法</p> <p>Red Hat Enterprise Linux 3.0 の 32 ビットバージョンを使用します。</p>
6262824	<p>hadbm が大文字を含むパスワードをサポートしていない。</p> <p>パスワードが hadb に格納される時に、パスワード内の大文字は小文字に変換されます。</p> <p>解決法</p> <p>大文字を含むパスワードは使用しないでください。</p>
6265419	<p>HADB Version 4.4.2.5 から HADB Version 4.4.1.7 にダウングレードすると、ma が各種のエラーコードで失敗する。</p> <p>以前の HADB バージョンにダウングレードすると、管理エージェントが各種のエラーコードで失敗する場合があります。</p> <p>解決法</p> <p>HADB データベースのダウングレードは可能ですが、リポジトリオブジェクトが変更されている場合は管理エージェントをダウングレードできません。ダウングレードのあとも、最新の HADB バージョンの管理エージェントを使用し続ける必要があります。</p>
6271063	<p>インストールまたは削除を行なっても、symlink が保持される。</p> <p>HADB c パッケージ (Solaris: SUNWhadb, Linux: sun-hadb-c) バージョン <m.n.u.p> のインストールまたは削除に関しては、symlink /opt/SUNWhadb/<m> はいったん作成されると、その後は何も手を加えられません。そのため、切り離された symlink が存在することがあり得ます。</p> <p>解決法</p> <p>使用中の場合を除き、インストールの前またはアンインストールの後に symlink を削除します。</p>
6273681	<p>大域ゾーンとローカルゾーンの管理エージェントが干渉することがある。</p> <p>Solaris 10 では、大域ゾーンで ma-initd スクリプトを使用して管理エージェントを停止すると、ローカルゾーンの管理エージェントも停止されます。</p> <p>解決法</p> <p>管理エージェントを大域ゾーンとローカルゾーンの両方にインストールしないでください。</p>

バグ ID	サマリー
6275103	<p>セッションオブジェクトがタイムアウトし、MA で削除されたとき、<code>hadbm/ma</code> はより適切なエラーメッセージを出力するべきである。</p> <p>場合によっては、サーバー上のリソース競合の問題によって管理クライアントが切断されることがあります。再接続時、「<code>hadbm:Error 22184:A password is required to connect to the management agent</code>」という紛らわしいエラーメッセージが返されることがあります。</p> <p>解決法</p> <p>サーバー上にリソースに関する問題があるかどうかを確認し、適切な処置 (たとえば、リソースの追加) を取ってから、操作を再実行します。</p>
6275319	<p>ルート以外のユーザーが HADB を管理できない。</p> <p>Java Enterprise System を使用して (ルートとして) インストールすると、ルート以外のユーザーは HADB を管理できなくなります。</p> <p>解決法</p> <p>HADB を管理するには、常にルートとしてログインします。</p>
6293912	<p>管理エージェントは特殊用途のインタフェースを使用するべきではない。</p> <p>0.0.0.0 のような IP アドレスを含む特殊用途のインタフェースを、管理エージェント内の HADB ノードが使用する有効なインタフェースとして登録するべきではありません。このようなインタフェースを登録すると、IP アドレスの代わりにホスト名を使用して <code>hadbm create</code> コマンドを発行するユーザーによってこのインタフェース上に HADB ノードが設定された場合に、問題が発生する場合があります。その場合、これらのノードは通信できなくなり、<code>create</code> コマンドはハングアップします。</p> <p>解決法</p> <p>複数のインタフェースを備えたホスト上で <code>hadbm create</code> を使用する場合は、DDN 形式を使用して IP アドレスを常に明示的に指定します。</p>

バグID	サマリー
6291562	<p>Windows 上で再構築が失敗する。</p> <p>Windows プラットフォームでは、特定の設定および負荷の下で、オペレーティングシステム内で多数の再構築の失敗が発生する場合があります。この問題は、20 を超えるノードが設定されている状況で、複数のテーブルスキャン (select *) を並列に実行している場合に発生しています。症状としては、トランザクションが頻繁に中止され、修復またはリカバリの完了に長い時間がかかるため、システムのさまざまな部分で頻繁なタイムアウトが発生していることが考えられます。</p> <p>解決法</p> <p>この問題を修正するには、Windows レジストリ変数 HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Services\Tcpip\Parameters をデフォルトの 100 より大きい値に設定します。この値を 0x1000 (4096) に増やすことをお勧めします。詳細は、Microsoft サポートページの記事 811003 (http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb;en-us;811003) を参照してください。</p>

インストール

ここでは、インストール上の既知の問題とその解決方法を示します。

バグID	サマリー
5009728	<p>一部の Linux システムで、「完了」ボタンをクリックしたあとにインストールの終了でハングアップする。</p> <p>この問題は、いくつかの Linux システム上で発生していました。これは Java Desktop System 2 でもっとも一般的に見られますが、Linux Red Hat ディストリビューションでも見られます。</p> <p>インストールプログラムの最後の画面で「完了」ボタンをクリックすると、インストールプログラムは製品の「バージョン情報」ページまたは製品登録ページを表示するブラウザウィンドウの起動に失敗し、コマンドプロンプトに戻ることなくハングアップします。</p> <p>解決法</p> <p>インストールプログラムを起動した端末ウィンドウで Ctrl+C を押すことにより、インストールプログラムを終了します。そのあとで、製品の「バージョン情報」ページまたは登録ページを表示するブラウザウィンドウが起動することがあります。ブラウザウィンドウが現れない場合には、ブラウザを起動してから次の URL を入力して「バージョン情報」ページを確認してください。</p> <pre>file://install_dir/docs-ee/about.html</pre> <p>製品を登録するインストールオプションを選択した場合には、「バージョン情報」ページ上の登録ページへのリンクをたどってください。</p>
6199697	<p>Windows では、インストール中に imq ディレクトリを作成する必要がある。</p> <p>Windows では、Application Server Enterprise Edition をインストールした直後に、ディレクトリ drive:\as\domains\domain1\imq が存在しない旨のメッセージを出力して Message Queue ブローカが起動に失敗します。</p> <p>domain1 を起動してからブローカを起動した場合には、Application Server によってディレクトリが作成され、この問題は発生しません。</p> <p>解決法</p> <p>1. ブローカを作成する前に var_home_dir_location を作成します。次のようにします。</p> <pre>\$imqbrokerd -varhome var_home_dir_location</pre> <p>次に例を示します。</p> <pre>\$imqbrokerd -varhome D:\as\domains\domain1\imq</pre>
6297837	<p>Application Server インストーラが、製品名「Sun Java(TM) System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q4」の中に間違った製品リリース日を表示している。</p> <p>解決法</p> <p>正しい製品名と日付は、「Sun Java(TM) System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2」となるべきです。</p>

バグID	サマリー
6395605	<p>Application Server 8.1 Update 2 Patch-8(JES4) では、Solaris SPARC 10 (3/05 s10_74L2a) での patchadd コマンドおよび patchrm コマンドによるパッチの追加が正しく行われたい。</p> <p>解決法</p> <p>Solaris SPARC 10 (1/06 s10s_u1wos_19) Update 1 をインストールします。</p>
6396045	<p>このバージョンの Application Server では、ネットワークファイルシステム (NFS) をサポートしない。</p>
6401383	<p>Windows MSI インストーラを使用して Application Server Enterprise Edition 8.1 Update 2 を Windows にインストールするとき、代替のインストールディレクトリあるいは代替の管理ポート、HTTP ポート、または HTTPS ポートを選択できない。インストールディレクトリについては、ドライブと3文字のディレクトリ名しか選択できません。</p> <p>解決法</p> <p>インストールディレクトリは変更できませんが、代替の管理ポート、HTTP ポート、HTTPS ポートの選択は可能です。その手順は、次のとおりです。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「標準」 > 「自動設定」 オプションの順に指定して Application Server をインストールします。 これによりデフォルトのドメインが作成されます。 2. すべての Application Server プロセスを停止してから、デフォルトのドメインを削除します。 3. <code>asadmin create-domain</code> と <code>ASConfigure.bat</code> を使用してドメインを再作成し、目的のパラメータを有効にします。
6403477	<p>Application Server のインクリメンタルインストールのあとでアンインストールが失敗する。</p> <p>解決法</p> <p>すべての Application Server プロセスを終了してシステムを再起動してから、アンインストールスクリプトをもう一度実行します。</p>

J2EE Tutorial

Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 で J2EE 1.4 Tutorial を実行するには、次の作業を実行します。

- 「About this Tutorial」の章の「About the Examples」で説明されているファイル例 `/common/build.properties` を編集する場合には、ポート 4848 を 4849 に変更します。
- `deploytool` を使用する場合、例を配備する前にサーバー `localhost:4849` を追加します。

- 管理コンソールを使用して何らかのリソースを作成する場合には、「ターゲット」タブを使用してサーバーをターゲットとして指定します。コマンド行または asant ターゲットを使用する場合、サーバーがデフォルトのターゲットになるため、特別な処置は必要ありません。

ライフサイクル管理

ここでは、ライフサイクル管理に関する既知の問題とその解決方法を示します。

バグ ID	サマリー
6193449	<p>ejb-timer-service プロパティの minimum-delivery-interval を 9000 に設定した後で ejb-timer-service プロパティの redelivery-interval-in-millis を 7000 に設定しようとする、次のエラーで set コマンドが失敗する。</p> <pre>[echo] Doing admin task set [exec] [Attribute(id=redelivery-interval-internal-in-millis) : Redelivery-Interval (7,000) should be greater than or equal to Minimum-delivery-interval-in-millis (9,000)] [exec] CLI137 Command set failed.</pre> <ul style="list-style-type: none"> ■ minimum-delivery-interval は、同一の周期タイマーの最小発生間隔。 ■ redelivery-interval-in-millis は、失敗した ejbTimeout のあとに再発生を試みるまでタイマーサービスが待機する時間。 <p>これは、再発生間隔のプロパティを最小発生間隔のプロパティと関連付けるロジックが間違っていて、GUI または CLI を使用して再発生間隔よりも最小発生間隔が大きくなるような値を設定できないという問題です。</p> <p>minimum-delivery-interval-in-millis を、ejb-timer-service プロパティの redelivery-interval-in-millis 以上の値に設定する必要があります。redelivery-interval-in-millis の値が minimum-delivery-interval-in-millis の値よりも大きいことを確認する Application Server でのチェックに問題がありません。</p> <p>解決法</p> <p>次のように、これらプロパティのデフォルト値を使用します。</p> <pre>minimum-delivery-interval(default)=7000 redelivery-interval-in-millis(default)=5000</pre> <p>これらデフォルト以外の値を指定するとエラーが発生します。</p>

ロギング

この節では、ログに関する既知の問題とその解決方法を示します。

バグID	サマリー
6180095	<p>access, failure についてデバッグ文を設定すると、Application Server の起動でハングアップする。</p> <p>JVM の <code>java.security.debug</code> オプションを設定すると、サーバーインスタンスの起動がデッドロックで動かなくなります。たとえば、<code>domain.xml</code> で次の設定を行うと、この問題が発生します。</p> <pre><jvm-options>-Djava.security.debug=access,failure</jvm-options></pre> <p>現時点ではありません。このフラグは設定しないでください。</p>

メッセージキュー

ここでは、Java メッセージキューに関する既知の問題とその解決方法を示します。

バグID	サマリー
6173308、 6189645、 6198481、 6199510、 6208728	<p>タイミングに依存する特定の場面に、JMS 再接続が正常に完了しない。</p> <p>タイミングに依存する場面での再接続の失敗は、さまざまな問題によって引き起こされます。</p> <p>解決法</p> <p>これらの問題は、次の方法で回避できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 関連するブローカを再起動する ■ 関連する Application Server インスタンスを再起動する
6198465	<p>非同期メッセージリスナーの動作が、<code>appclient</code> で 8.0 から 8.1 Update 2 に変更された。</p> <p>最新の変更により、非同期メッセージリスナーが <code>app-client</code> コンテナの唯一の稼働しているスレッドである場合、残っている <code>appclient</code> 仮想マシンはデーモンとして存在します。この動作は、ACC で非同期受信を実行する過去のアプリケーションの影響です。この問題は、JMS メッセージリスナーを設定してメインスレッドを終了するアプリケーションクライアントに影響します。</p> <p>解決法</p> <p>メインスレッドを終了しないでください。メッセージリスナーがメインスレッドに通知するのを待ってから、メインスレッドを終了します。</p>

監視

ここでは、監視上の既知の問題とその解決方法を示します。

バグ ID	サマリー
6174518	<p>HTTP サービスの監視統計には有益な情報を提示しないため、無視する必要があるものがある。</p> <p>HTTP サービスの一部の要素の監視統計を参照した場合、示される値のいくつかは現在の値に対応していないか、または常に0になっています。特に、次の HTTP サービス統計は Application Server に適用できる情報を表していないため、無視すべきです。</p> <ul style="list-style-type: none">■ http-service<ul style="list-style-type: none">load1MinuteAverageload5MinuteAverageload15MinuteAveragerateBytesTransmittedrateBytesReceived■ pwc-thread-pool (the element) <p>解決法</p> <p>これらの監視情報は将来のリリースで削除され、より適切な情報で置き換えられる予定です。</p>

バグID	サマリー
6191092	<p data-bbox="539 213 1343 265">該当する監視名を持つ統計をすべて削除した場合でも、配備を取り消された EJB モジュールに対する監視 MBean が削除されない。</p> <p data-bbox="539 282 728 303">次に例を示します。</p> <pre data-bbox="539 331 1286 383">EJBModuleMonitorMap().size() = 1 eventhough ejb module is undeployed EJBModuleMonitor().getName() = sqe_ejb_s1_01</pre> <p data-bbox="539 401 1343 479">これは、EJB モジュールとアプリケーションの両方に当てはまります。MBean API 経由のプログラムを使用しても、<code>asadmin list/get</code> を使用しても、空の監視 MBean が残っています。</p> <p data-bbox="539 496 585 517">診断</p> <pre data-bbox="539 545 1308 770">asadmin list -m "server.applications" shows the following output: server.applications.MEjbApp server.applications.__ejb_container_timer_app server.applications.adminapp server.applications.admingui server.applications.com_sun_web_ui server.applications._export_install_nov-11_domains_domain1_applications _j2ee-modules_sqe_ejb_s1_01</pre> <p data-bbox="539 788 996 808">次のようにして統計を調べることができます。</p> <pre data-bbox="539 836 1239 992">bin/asadmin list -m "server.applications._export_install_nov-11_ domains_domain1_applications_j2ee-modules_sqe_ejb_s1_01" server.applications._export_install_nov-11_domains_domain1_ applications_j2ee-modules_sqe_ejb_s1_01.SQEMessageserver. applications._export_install_nov-11_domains_domain1_applications_ j2ee-modules_sqe_ejb_s1_01.TheGreeter</pre> <p data-bbox="539 1010 839 1031">いったん配備を取り消します。</p> <pre data-bbox="539 1058 1239 1111">_export_install_nov-11_domains_domain1_applications_j2ee-modules_ sqe_ejb_s1_01</pre> <p data-bbox="539 1128 1282 1149">ここで <code>list</code> コマンドを実行すると、まだアプリケーションが残っています。</p> <pre data-bbox="539 1177 1176 1402">asadmin list -m "server.applications" server.applications.MEjbApp server.applications.__ejb_container_timer_app server.applications._export_install_nov-11_domains_domain1_ applications_j2ee-modules_sqe_ejb_s1_01 server.applications.adminapp server.applications.admingui server.applications.com_sun_web_ui</pre> <p data-bbox="539 1420 973 1440">しかし、何の監視統計も含まれていません。</p> <pre data-bbox="539 1468 1186 1597">asadmin list -m "server.applications._expo rt_install_nov-11_domains_domain1_applications_j2ee-modules_ sqe_ejb_s1_01" Nothing to list at server.applications.-export-install-nov- 11-domains-domain1-applications-j2ee-modules-sqe-ejb-s1-01.</pre>

バグID	サマリー
	<p>ある文字列で始まる有効な名前を取得するには、ワイルドカード文字(「*」)を使用します。たとえば、serverで始まるすべての監視可能エンティティの名前を一覧表示するには、list "server.*"を使用します。</p> <p>解決法</p> <p>これは無害です。何の問題もなくモジュールを再配備できます。ルート監視MBeanは削除されませんが、その内容は空です。</p>

PointBase

ここでは、PointBaseに関する既知の問題とその解決方法を示します。

バグID	サマリー
6184797	<p>アプリケーションの接続プールに対して遮断レベルを設定すると、PointBaseで例外が発生する。</p> <p>PointBase データベースインストールを指している JDBC 接続プールについて、transaction-isolation-level プール属性をデフォルト (Connection.TRANSACTION_READ_COMMITTED) 以外の任意の値に設定すると、例外が発生します。ただし、その他のデータベースを指すプールについてデフォルト以外の値にこのパラメータを設定しても、例外はスローされません。</p> <p>解決法</p> <p>PointBase データベースを指す JDBC 接続プールについては、transaction-isolation-level を設定しないでください。</p>
6204925	<p>ネットワークサーバードライバと組み込みドライバを一緒に使用すると、PointBase が例外をスローする。</p> <p>ネットワークサーバードライバと組み込みドライバを同時に使用すると、PointBase が例外をスローすることがあります。</p> <p>解決法</p> <p>組み込みドライバとネットワークサーバードライバの両方ではなく、どちらか一方だけを使用してください。</p>

バグID	サマリー
6264969、 6275448	<p>デフォルトの PointBase データベースが上書きされるというアップグレードの問題がある。</p> <p>Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 Update 2 にアップグレードすると、アップデートリリースパッチによって Pointbase デフォルトデータベースが上書きされます。</p> <p>解決法</p> <p>アップグレードの前に存在していたスキーマまたはデータを、すべて再作成または再入力します。テーブル生成オプションを使用して CMP Beans を含むアプリケーションを配備した場合は、テーブルを再作成するために、アプリケーションの配備の取消しまたは再配備を行う必要があります。</p>

サンプル

ここでは、Application Server 8.1 製品に付属するサンプルコードに関する既知の問題とその解決方法を示します。

バグID	サマリー
6195092	<p>setup-one-machine-cluster が、Windows ではハングアップするが、Solaris では動作する。mqfailover を Ctrl+C でキャンセルし、再実行する必要がある。</p> <p><i>install_dir</i>\samples\ee-samples\failover\apps\mqfailover\docs\index.html を参照してから、次のコマンドを実行します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ コンソール 1 <pre>cd <i>install_dir</i>\samples\ee-samples asant start-mq-master-broker1</pre> <ul style="list-style-type: none">■ コンソール 2 <pre>cd <i>install_dir</i>\samples\ee-samples asant start-mq-cluster-broker1</pre> <ul style="list-style-type: none">■ コンソール 3 <pre>cd <i>install_dir</i>\samples\ee-samples asant start-mq-cluster-broker2</pre> <ul style="list-style-type: none">■ コンソール 4 <pre>cd <i>install_dir</i>\samples\ee-samples asadmin start-domain domain1</pre> <p>別の Enterprise Edition サンプル用に asant setup-one-machine-cluster-without-ha または asant setup-one-machine-cluster-with-ha を実行済みであれば asant configure-mq を、それ以外の場合には asant setup-one-machine-cluster-and-configure-mq を実行します。この場合、次に示すように、コマンドが正常に実行されたように見えます。</p> <pre>start_nodeagent: [echo] Start the node agent cluster1-nodeagent [exec] Command start-node-agent executed successfully.</pre> <p>しかし、このあとシステムはハングアップします。</p> <p>解決法</p> <p>現時点ではありません。この問題は、Windows でこの ant ターゲットを使用するすべての Enterprise Edition サンプルに同様に影響します。回避策は、ハングアップしたプロセスを Ctrl+C でキャンセルしてから再実行することです。</p>

バグID	サマリー
6198003	<p data-bbox="539 213 1329 291">MQ フェイルオーバーのサンプルアプリケーションを実行する前に、<code>asadmin deploy</code> 命令の後で JMS リソースを作成する必要があることが、マニュアルに明記されていない。</p> <p data-bbox="539 310 839 331">次のエラーがスローされます。</p> <pre data-bbox="539 359 1286 604">/opt/SUNWappserver/domains/domain1/config/sun-acc.xml -name MQFailoverTestClient -textauth -user j2ee -password j2ee Nov 18, 2004 10:50:17 PM com.sun.enterprise.naming.NamingManagerImpl bindObjects SEVERE: NAM0006: JMS Destination object not found: jms/durable/TopicA Nov 18, 2004 10:50:18 PM com.sun.enterprise.naming.NamingManagerImpl bindObjects SEVERE: javax.naming.NameNotFoundException javax.naming.NameNotFoundException</pre> <p data-bbox="539 623 1329 730"><code>asadmin deploy</code> コマンドを使用して手動配備を行う場合に JMS リソースを手動で作成する必要があること、そして、サンプルアプリケーションを配備するために用意されている <code>ant</code> ターゲットを使用する必要があることが、マニュアルに明記されていません。</p> <p data-bbox="539 749 605 770">解決法</p> <p data-bbox="539 796 1322 878"><code>build.xml</code> スクリプト用に <code>asant deploy</code> ターゲットを使用します。これにより、アプリケーションを実行するために必要とされる JMS リソースが作成されます。</p>

バグID	サマリー
6198239	<p>Linux で、webservices/security サンプルでの証明書の作成中に実行時エラーが表示される。</p> <p>Linux で <code>install_dir/samples/webservices/security</code> のサンプル (basicSSL) を配備するときに、証明書が作成されず、次のようなエラーがスローされます。</p> <pre>generate_certs: [echo] ***Exporting certificate from NSS database [exec] Result: 1 [echo] ***Generating Java Keystore from generated certificate [exec] keytool error: java.lang.Exception: Input not an X.509 certificate [exec] Result: 1 [echo] ***Generating Java trust store from generated certificate [exec] keytool error: java.lang.Exception: Input not an X.509 certificate [exec] Result: 1 . . . generate_certs: [echo] ***Exporting server certificate from NSS database to a PKCS12 certificate file [exec] /opt/sun/appserver/lib/pk12util: /usr/lib/libnss3.so: version 'NSS_3.9' not found (required by /opt/sun/appserver/lib/pk12util) [exec] /opt/sun/appserver/lib/pk12util: /usr/lib/libnss3.so: version 'NSS_3.6' not found (required by /opt/sun/appserver/lib/pk12util) [exec] /opt/sun/appserver/lib/pk12util: /usr/lib/libnss3.so: version 'NSS_3.7' not found (required by /opt/sun/appserver/lib/pk12util) [exec] Result: 1</pre> <p>問題は、Linux での NSS ライブラリの場所が Solaris での場所と異なることにあります。Linux 上に配備する場合、LD_LIBRARY_PATH が適切な NSS ライブラリを指していることを確認する必要があります。LD_LIBRARY_PATH を環境に設定するか、<code>install_dir/bin/asant</code> シェルラッパースクリプトに設定します。</p> <p>解決法</p> <p>次のいずれかの操作を行います。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ LD_LIBRARY_PATH=/opt/sun/private/lib を設定します。 ■ 次の行を <code>install_dir/bin/asant</code> スクリプトに追加します。 <pre>LD_LIBRARY_PATH=\$AS_NSS:\$LD_LIBRARY_PATH;export LD_LIBRARY_PATH</pre>

セキュリティー

ここでは、Application Server と Web アプリケーションのセキュリティーおよび証明書に関する既知の問題とその解決方法を示します。

バグID	サマリー
6183318	<p>Enterprise Edition 上で J2SE 5.0 を使用して <code>WebServiceSecurity</code> アプリケーションを実行できない。</p> <p><code>WebServiceSecurity</code> アプリケーションは、次の理由から、J2SE 5.0 では実行できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ J2SE 5.0 の PKCS11 は、UNWRAP モードをサポートしない ■ J2SE 5.0 の PKCS11 は、PKCS11 による RSA/ECB/OAEPWithSHA1AndMGF1Padding をサポートしない <p>J2SE チームは、このバグのために「CR 6190389: Add support for RSA-PKCS1 and RSA-OAEP wrap/unwrap mechanisms」をファイルしています。</p> <p>解決法</p> <p>J2SE 1.4.2 で別の JCE プロバイダ (デフォルトで含まれているもの以外) を使用します。この構成では、ハードウェアアクセラレータはサポートされません。</p>
6269102	<p>SSL 終了が機能しない。ロードバランサ (ハードウェア) を SSL 終了用に設定すると、リダイレクト中に Application Server がプロトコルを https から http に変更する。</p> <p>解決法</p> <p>ハードウェアロードバランサと Application Server の間にソフトウェアロードバランサを追加します。</p>

アップグレードユーティリティー

この節では、アップグレードユーティリティーに関する既知の問題とその解決方法を示します。

バグID	サマリー
6165528	<p>Enterprise Edition 8 から Application Server Enterprise Edition 8.1 にアップグレードするときに、<code>install_dir/domains</code> ディレクトリ以外のカスタムパスに作成されたドメインが直接アップグレードされない。</p> <p>アップグレードユーティリティーを実行しているときに、<code>install_dir</code> をソースインストールディレクトリとして指定すると、そのアップグレードプロセスは、<code>install_dir/domains</code> ディレクトリの下に作成されたドメインだけをアップグレードします。その他の場所に作成されたドメインはアップグレードされません。</p> <p>解決法</p> <p>アップグレードプロセスを起動する前に、すべてのドメインディレクトリを、それぞれの場所から <code>install_dir/domains</code> ディレクトリに移動します。</p>

バグID	サマリー
6207337	<p>一部の Linux システムで、「代替アップグレード」を実行しているインストーラが、「アップグレードウィザードの起動」ボタンのクリック後にアップグレードツールの起動に失敗する。</p> <p>この問題はさまざまな Linux システムで発生しています。Java Desktop System 2 でもっとも一般的ですが、Red Hat ディストリビューションでも発生しています。</p> <p>インストールプログラムの最後の画面で「アップグレードツールの起動」ボタンをクリックすると、そのインストールプログラムはアップグレード処理を完了するためのアップグレードツールの起動に失敗し、コマンドプロンプトに戻ることなくハングアップします。</p> <p>解決法</p> <p>この問題は、コマンド行インストールモードを使って代替アップグレードを実行している場合には発生しません。</p> <ol style="list-style-type: none">GUI モードで代替アップグレードを実行してこの問題が発生した場合には、インストールプログラムを起動した端末ウィンドウで Ctrl+C を押すことにより、そのインストールプログラムを終了します。その端末ウィンドウから次のコマンドを使ってアップグレードツールを起動します。 <pre>install_dir/bin/asupgrade --source install_dir/domains --target install_dir --adminuser adminuser --adminpassword adminpassword --masterpassword changeit</pre><i>adminuser</i> および <i>adminpassword</i> は、アップグレード中のインストールで使用されている値に一致する必要があります。アップグレードツールがアップグレードプロセスを完了したあとは、ブラウザを起動して次の URL を入力することにより、「バージョン情報」ページを参照できます。 <pre>file://install_dir/docs-ee/about.html</pre> <p>製品を登録するインストールオプションを選択した場合には、「バージョン情報」ページ上の登録ページへのリンクをたどってください。</p>
6296105	<p>8.0 Platform Edition (PE) から 8.1 Enterprise Edition (EE) UR2 へのアップグレード中およびその後、自己署名付き証明書が信頼されない。</p> <p>解決法</p> <p>アップグレード後、ターゲットの <code>domain.xml</code> から次のエントリを削除し、サーバーを再起動します。</p> <pre><jvm-options>-Djavax.net.ssl.keyStore=\${com.sun.aas.instanceRoot} /config/keystore.jks</jvm-options> <jvm-options>Djavax.net.ssl.trustStore=\${com.sun.aas.instanceRoot} /config/cacerts.jks</jvm-options></pre>

バグID	サマリー
6331685	<p>ファイルベースインストーラでの完全再インストールを回避する方法として、ドメイン、エージェントディレクトリの外部化について記述する。</p> <p>ファイルベースのインストールパッチを適用するごとに、すべてのアプリケーションの再設定と再実行または再配備を行う必要が生じる場合があります。これは時間がかかり、エラーが起きやすい作業です。</p> <p>解決法</p> <p>完全再インストールを実行せずに済むように、DAS、ノードエージェント、HADB、およびMQインスタンスを、AS8.1 インストールのサブディレクトリまたはパスから外部化します。</p> <p>たとえば、DAS ドメインを /work/jnditest に対して外部化するには、次のように実行します。</p> <pre>./asadmin create-domain --domaindir /work \ --adminport 7878 --adminuser admin --instanceport 7870 jnditest</pre> <p>ノードエージェントを /work/nagent に対して外部化するには、次のように実行します。</p> <pre>./asadmin create-node-agent --agentdir=/work \ --port 7878 --host \$dashost --user admin nagent</pre> <p>最後に、外部化した DAS を起動するには、次のように実行します。</p> <pre>./asadmin start-domain --domaindir /work -u admin jnditest</pre>

バグID	サマリー
6436590	<p>JES と共存している AS7.x をアンインストールすると、JES appserver が失敗する。</p> <p>Application Server 7.x をアンインストールすると、一緒にインストールしたすべてのコンポーネントが削除されます。そのあとで Application Server 8.x にアップグレードすると、インストールに必要な一部のコンポーネントが失われているために、インストールが失敗します。</p> <p>解決法 1</p> <p>Application Server 8.x をインストールする前に、7.x をアンインストールしないでください。</p> <p>解決法 2</p> <p>pkgmgr SUNWas* を使用して、Application Server 7.x に所属するパッケージを手動でアンインストールします。次に例を示します。</p> <pre> 8 - system SUNWasaco Sun Java System Application Server Admin Client, unbundled 10 - system SUNWascmlo Sun Java System Application Server Shared Libraries, unbundled 13 - system SUNWascmo Sun Java System Application Server unbundled (common) 17 - system SUNWasdmo Sun Java System Application Server Sample Applications, unbundled 18 - system SUNWashaco Sun Java System Application Server Admin Client Extension, unbundled 20 - system SUNWashdmo Sun Java System Application Server HA Sample Applications, unbundled 21 - system SUNWashmano Sun Java System Application Server Extension Manual Pages 22 - system SUNWasho Sun Java System Application Server HA Extension, unbundled 26 - system SUNWasmano Sun Java System Application Server Standard Manual Pages 27 - system SUNWaso Sun Java System Application Server, unbundled (opt) 28 - system SUNWasro Sun Java System Application Server, unbundled (root) </pre>

バグID	サマリー
	この方法を使用する場合、 <code>prodreg unregister</code> を使用して、 <code>productregistry</code> で の無効なエントリをクリーンアップする必要があることに注意してください。

Web コンテナ

ここでは、Web コンテナに関する既知の問題とその解決方法を示します。

バグ ID	サマリー
5004315	<p data-bbox="475 213 1260 291">Windows で、<code>--precompilejsp=true</code> を使用してアプリケーションを配備すると、そのアプリケーションの JAR ファイルがロックされ、その後の配備取り消しや再配備が失敗することがある。</p> <p data-bbox="475 314 1275 499">Microsoft Windows にアプリケーションを配備するときに JSP のプリコンパイルを要求すると、それ以降、そのアプリケーションの配備取り消しや、そのアプリケーション (または同一モジュール ID を持つ任意のアプリケーション) の再配備を試みても、予期したとおりに動作しません。この問題は、JSP のプリコンパイル処理でアプリケーションの JAR ファイルが開かれたまま閉じられないため、Microsoft Windows がこれらのファイルを配備取り消しで削除することや、これらのファイルを再配備で上書きすることを許可しないことにあります。</p> <p data-bbox="475 522 1275 687">配備取り消しは、Application Server からアプリケーションが論理的に削除されるという点では成功します。また、<code>asadmin</code> ユーティリティからエラーメッセージは返されませんが、そのアプリケーションのディレクトリとロックされた jar ファイルはサーバー上に残っています。サーバーのログファイルには、ファイルとアプリケーションディレクトリの削除に失敗した旨のメッセージが出力されます。</p> <p data-bbox="475 710 1275 843">配備取り消し後のアプリケーションの再配備が失敗するのは、既存のファイルとディレクトリをサーバーが削除しようとして失敗するからです。これは、最初に配備されたアプリケーションと同じモジュール ID を持つアプリケーションを配備しようとしたときにも発生します。アプリケーションのファイルを保持するディレクトリの名前を、サーバーはモジュール ID から決定するからです。</p> <p data-bbox="475 866 1260 916">同様の理由から、配備取り消しをせずにアプリケーションを再配備しようすると失敗します。</p> <p data-bbox="475 939 519 956">診断</p> <p data-bbox="475 979 1275 1058">アプリケーションを再配備しようとする、または、配備取り消しを行ってから配備しようすると、<code>asadmin</code> ユーティリティは次のようなエラーを返します。</p> <pre data-bbox="475 1081 1275 1161">An exception occurred while running the command. The exception message is: CLI171 Command deploy failed : Deploying application in domain failed; Cannot deploy. Module directory is locked and can't be deleted.</pre> <p data-bbox="475 1183 544 1201">解決法</p> <p data-bbox="475 1223 1275 1333">アプリケーションを配備するときに <code>--precompilejps=false</code> (デフォルトの設定) を指定すると、この問題は発生しません。そのアプリケーションを最初を使用するときに JSP コンパイルが起動されるため、最初の要求に対する応答時間は、その後の要求に比べて長くなります。</p> <p data-bbox="475 1355 1260 1465">また、プリコンパイルを行う場合には、そのアプリケーションを配備取り消しまたは再配備する前に、サーバーを終了して再起動する必要があります。シャットダウンすると、ロックされている JAR ファイルが解放されるため、再起動後の配備取り消しや再配備が成功します。</p>

バグID	サマリー
6172006	<p data-bbox="539 210 1310 262">空の <code><load-on-startup></code> 要素を持つ Servlet 2.4 ベースの <code>web.xml</code> を含んだ WAR ファイルを配備できない。</p> <p data-bbox="539 279 1340 357"><code>web.xml</code> のオプションの <code>load-on-startup</code> 要素は、サーブレットを宣言する Web アプリケーションの起動の一環として、そのサーブレットをロードおよび初期化すべきことを示します。</p> <p data-bbox="539 374 1340 513">この要素のオプションの内容は、Web アプリケーションのその他のサーブレットとの関係で、そのサーブレットをロードおよび初期化する順序を示す整数です。空の <code><load-on-startup></code> は、そのサーブレットを含む Web アプリケーションの起動時にそのサーブレットがロードおよび初期化される場合、その順序は意味を持たないことを表します。</p> <p data-bbox="539 531 1340 670"><code>web.xml</code> の Servlet 2.4 スキーマでは、空の <code><load-on-startup></code> はサポートされなくなりました。つまり、Servlet 2.4 ベースの <code>web.xml</code> を使用する場合は整数値を指定する必要があります。 <code><load-on-startup/></code> の場合と同様に、空の <code><load-on-startup></code> を指定すると、<code>web.xml</code> が <code>web.xml</code> の Servlet 2.4 スキーマに対する妥当性検証に失敗するため、Web アプリケーションの配備も失敗します。</p> <p data-bbox="539 687 1340 739">下位互換性の問題もあります。空の <code><load-on-startup></code> は、Servlet 2.3 ベースの <code>web.xml</code> では有効です。</p> <p data-bbox="539 756 608 782">解決法</p> <p data-bbox="539 800 1340 887">Servlet 2.4 ベースの <code>web.xml</code> を使用する場合は、<code><load-on-startup>0</load-on-startup></code> を指定して、サーブレットの読み込み順序が問題にならないことを示します。</p>

バグ ID	サマリー
6184122	<p data-bbox="475 213 1175 230">リソースに制約のあるサーバー上で JSP ページをコンパイルできない。</p> <p data-bbox="475 256 1272 335">JSP ページにアクセスしてもコンパイルに失敗し、サーバーログには「Unable to execute command」というエラーメッセージと次のスタックトレースが記録されます。</p> <pre data-bbox="475 361 1219 631">at org.apache.tools.ant.taskdefs.Execute\$Java13CommandLauncher.exec (Execute.java:655) at org.apache.tools.ant.taskdefs.Execute.launch (Execute.java:416) at org.apache.tools.ant.taskdefs.Execute.execute (Execute.java:427) at org.apache.tools.ant.taskdefs.compilers. DefaultCompilerAdapter.executeExternalCompile(DefaultCompilerAdapter. java:448) at org.apache.tools.ant.taskdefs.compilers.JavacExternal. execute(JavacExternal.java:81) at org.apache.tools.ant.taskdefs. Javac.compile(Javac.java:842) at org.apache.tools.ant.taskdefs.Javac. execute(Javac.java:682) at org.apache.jasper.compiler.Compiler. generateClass(Compiler.java:396)</pre> <p data-bbox="475 652 544 670">解決法</p> <p data-bbox="475 696 1112 713">JSP のコンパイルスイッチを「fork」から「false」に設定します。</p> <p data-bbox="475 739 886 756">これは、次のいずれかの方法で行えます。</p> <ul data-bbox="475 774 1272 852" style="list-style-type: none">■ グローバルに行うには、次のように、 \${S1AS_HOME}/domains/domain1/config/default-web.xml 内の JspServlet の fork init パラメータを false に設定します。 <pre data-bbox="511 887 1236 1017"><servlet> <servlet-name>jsp</servlet-name> <servlet-class>org.apache.jasper.servlet.JspServlet</servlet-class> ... <init-param> <param-name>fork</param-name> <param-value>>false</param-value> </init-param> ... </servlet></pre> <ul data-bbox="475 1034 1258 1086" style="list-style-type: none">■ Web アプリケーションごとに、sun-web.xml の JSP 設定プロパティ fork を false に設定します。次のようにします。 <pre data-bbox="511 1121 1205 1164"><sun-web-app> <jsp-config> <property name="fork" value="false" /> </jsp-config> </sun-web-app></pre> <p data-bbox="475 1185 1268 1229">これらのいずれかを設定することにより、ant が javac コンパイルのための新規 プロセスを生成することが防止されます。</p>

バグID	サマリー
6188932	<p data-bbox="539 213 1342 265">Application Server で、auth-passthrough Web Server 6.1 アドオンがサポートされない。</p> <p data-bbox="539 288 1342 421">Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 Update 2 では、Sun Java System Application Server Enterprise Edition 7.1 で使用できる auth-passthrough プラグイン関数が提供する機能に対するサポートが追加されています。ただし、Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 Update 2 での auth-passthrough プラグイン機能の設定方法は異なります。</p> <p data-bbox="539 444 1342 496">Application Server Enterprise Edition 7.1 での auth-passthrough プラグイン関数は、次に示す 2 層配備のシナリオで有効でした。</p> <ul data-bbox="539 505 1342 638" style="list-style-type: none"> <li data-bbox="539 505 1342 557">■ Application Server インスタンスは、企業ファイアウォールの内側にある 2 番目のファイアウォールによって保護される。 <li data-bbox="539 574 1342 626">■ Application Server インスタンスへの直接のクライアント接続は許可されない。 <p data-bbox="539 652 1342 899">このようなネットワークアーキテクチャーの場合、クライアントは、service-passthrough プラグイン関数で設定されたフロントエンド Web サーバーに接続し、HTTP 要求を、プロキシされた Application Server インスタンスに転送して処理します。Application Server インスタンスは、要求をクライアントホストから直接にはなく、Web サーバードプロキシからしか受信できません。その結果、プロキシされた Application Server インスタンス上に配備され、クライアントの IP アドレスなどのクライアント情報を照会する任意のアプリケーションは、中継された要求の実際の発信元ホストであるプロキシホストの IP を受信します。</p> <p data-bbox="539 925 1342 1086">Application Server Enterprise Edition 7.1 では、プロキシされた Application Server インスタンス上で、そのインスタンス上に配備された任意のアプリケーションがリモートクライアントの情報を直接使用するように auth-passthrough プラグイン関数を設定できました。その場合は、プロキシされた Application Server インスタンスが、service-passthrough プラグインを実行している中間の Web サーバード経由ではなく、要求を直接受信したかのように見えます。</p> <p data-bbox="539 1112 1342 1216">Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 Update 2 では、domain.xml 内の <http-service> 要素の authPassthroughEnabled プロパティを TRUE に設定することにより、auth-passthrough 機能を有効にすることができます。次に例を示します。</p> <pre data-bbox="539 1242 1113 1263"><property name="authPassthroughEnabled" value="true"/></pre> <p data-bbox="539 1289 1342 1607">Application Server Enterprise Edition 7.1 にある auth-passthrough プラグイン関数のセキュリティに関する同じ注意点が、Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 Update 2 にある authPassthroughEnabled プロパティにも適用されます。authPassthroughEnabled によって、認証目的に使用される可能性のある情報(要求発信元の IP アドレスや SSL クライアント証明書など)を上書きすることが可能になるため、authPassthroughEnabled を TRUE に設定して Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 Update 2 インスタンスへの接続を許可する場合は、その対象を信頼できるクライアントまたはサーバーだけに限定することがきわめて重要です。予防措置として、authPassthroughEnabled を TRUE に設定するのは、企業ファイアウォールの内側にあるサーバーだけにすることをお勧めします。インターネット経由でアクセス可能なサーバーでは、決して authPassthroughEnabled を TRUE に設定しないでください。</p>

バグ ID	サマリー
6332486	<p data-bbox="472 210 1276 435">プロキシ Web サーバーが service-passthrough プラグインを使用して設定されており、要求を authPassthroughEnabled が TRUE に設定された Application Server 8.1 Update 2 インスタンスに転送するシナリオでは、SSL クライアント認証は Web サーバープロキシ上で有効になり、プロキシされた Application Server 8.1 Update 2 インスタンス上で無効になる可能性があることに注意してください。この場合、プロキシされた Application Server 8.1 Update 2 インスタンスは、SSL 経由で認証されたかのように引き続き要求を処理し、クライアントの SSL 証明書を、それを要求している任意の配備されたアプリケーションに提供します。</p> <p data-bbox="472 458 1276 510">『Developers Guide』では IDE を使用したデバッグ方法について NetBeans 3.6 を取り上げているが、4.1 以降のシナリオにアップグレードするべきである。</p> <p data-bbox="472 532 1276 748">『Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 Developer's Guide』の『Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.1 2005Q2 Developer's Guide』の「Using an IDE」の節では、デバッグに NetBeans 3.6 IDE を使用する方法が記述されていますが、これは NetBeans 4.1 以降の説明に替えるべきです。NetBeans 3.6 よりもあとのバージョンを使用した方法の説明については、『Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.2 Developer's Guide』の『Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.2 Developer's Guide』の「Using an IDE」の節を参照してください。</p>
